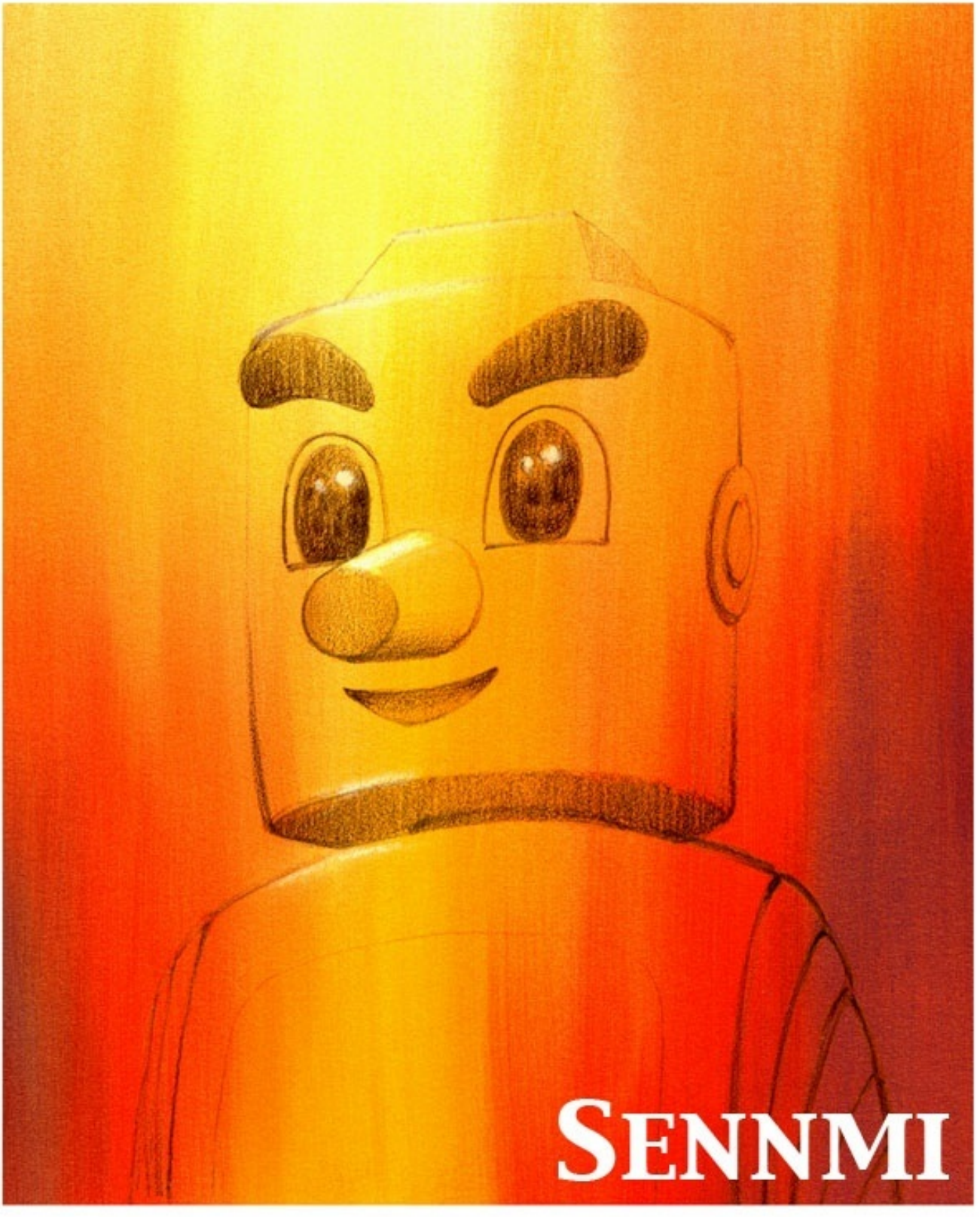
彼はロボット55号



SENNMI

もくじ

1　人間はきらいだ …… 2

2　森での生活 …… 17

3　太郎との出会い …… 24

4　オオカミから逃(に)げる …… 42

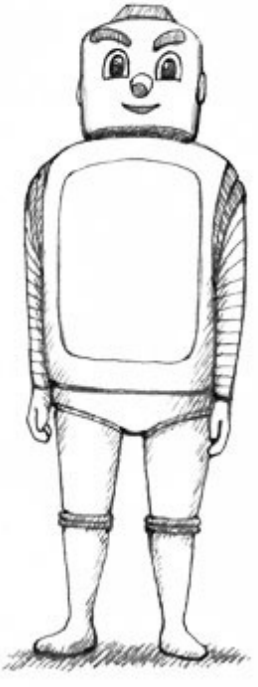
5　やっぱり人間と仲良(なかよ)くしたい …… 56

6　ほら穴の中で …… 62

7　クマの激(はげ)しい攻撃(こうげき) …… 76

8　悪魔(あくま)のクマと熱意(ねつい)の55号 …… 86

9　その後(ご) …… 103



1　人間はきらいだ

カランカランと音を立てながら通(とお)りを歩いてくるのは、ロボットの55号である。

彼(かれ)は、生活に必要(ひつよう)なものが入ったでっかいバックを背負(せお)い、両手にも手さげカバンを持(も)って、ゆっさゆっさと歩いていた。

やかんと鍋がぶつかるカランカランという音に合わせて、
「家事のお手伝いー。家事のお手伝いは要りませんかー」
と、彼は声を張り上げた。彼の仕事は、料理、洗たく、そうじのお手伝いをすることだった。
そして、彼はロボットだが、人間と仲良くなって、人間といっしょに楽しく暮らせたらなあと、いつも思っていた。
でも、仲良しの人間は、まだ一人もいなかった。

素晴らしい秋晴れで、通りのイチョウの葉が黄色にかがやいていた。

55 号は気持ちよく声をかけながら歩いていると、
「お手伝い屋さーん、ちょっとー、お手伝い屋さーん」
赤ちゃんを抱いたお母さんが、二階の窓から手を振って彼を呼びとめた。横には、お母さんと同じ髪型をした女の子もいた。

「いま赤ちゃんがいて大変なの。お手伝いお願いするわ」
と、お母さんが言うと、
「お手伝いお願いするわ」
そばにいた子供がおもしろがって、お母さんの口調を真似て同じことを言った。
お母さんも子供も、にこにこしながら 55 号を迎えてくれた。

（この家の人たちは、明るくて親しみが持てそうだ。仲良くなれるといいなあ）
と、55 号は期待した。

「呼んでいただき、ありがとうございます。頑張ります」
55 号はそう言って、頭にねじり鉢巻きをして気合いを入れた。
子供は、楽しそうにその様子を見ていた。

「55号さん、お皿を洗(あら)って」

「はーい、わかりました」

「洗(せん)たくものを洗って」

「はーい、わかりました」

「それから55号さん、床を拭(ふ)いて」

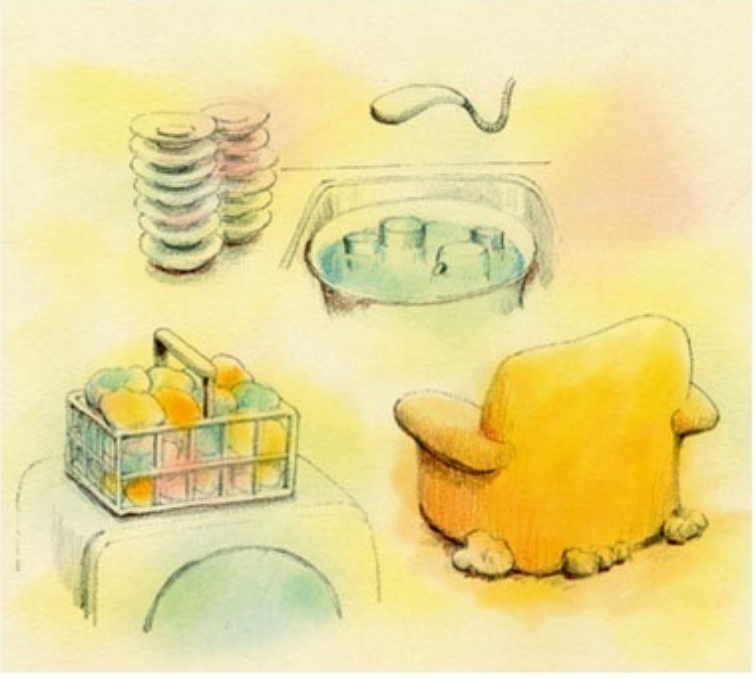
「はいはーい、わかりました」

彼は、少しも休まず一生懸命(けんめい)に仕事(しごと)をした。

しかし、

「55号さん、だめじゃないの！」

その家のお母さんは、すごく怒(おこ)っていた。



「お皿だけ洗って、なぜコップを洗わないの？

なぜ床に落(お)ちている紙くずを拾(ひろ)わないの？

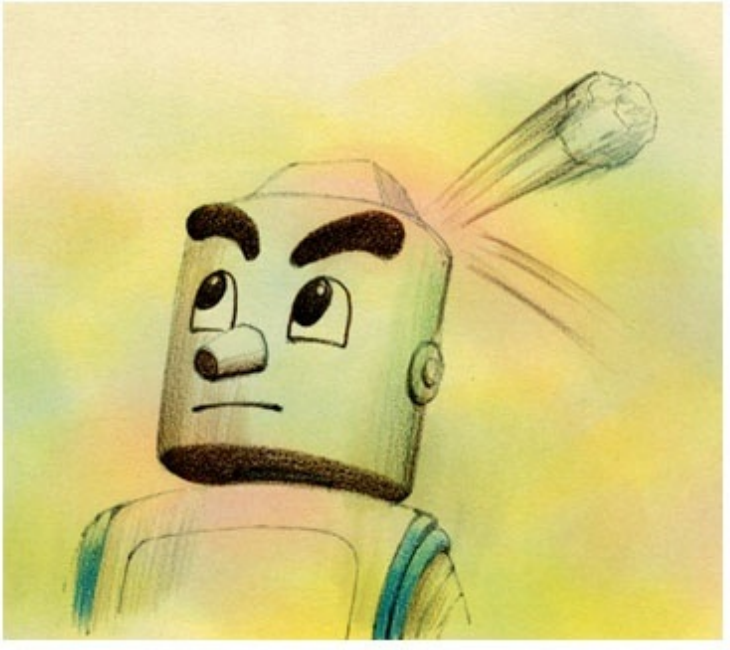
洗たくものを洗ったままで、なぜ乾(かわ)かさないの？」

「本当にもう！ロボットはやっぱりだめねぇ」

お母さんは、けわしい顔(かお)で55号に文句(もんく)を言った。

「ロボットはやっぱりだめねぇ」

と、子供も同じ口調(くちょう)で言い、紙くずを投(な)げつけた。



（僕は、言われたとおりに仕事をしたんだ。休まず頑張ってやったんだ。

ほめられると思っていたのに、怒られるなんて。お皿を洗えって、洗たくものを洗えって、床を拭けって言ったじゃないか。だから僕はそうしたんだ。最初からコップも洗えって、洗たくものは洗ったら乾かせって、床に紙くずが落ちていたら拾えって言えばいいじゃないか。

言わないで僕を叱るなんて間違っているよ。僕は絶対に悪くない。）

彼は、なぜ怒られるのか全く納得がいかなかった。

55号は、言われたことを正確にやるロボットなのだ。その正確さが、いつも仕事で失敗する原因だった。

55号は、数時間で追(お)い出されてしまった。
はぁーと、彼は大きなため息(いき)をついた。
人間と仲良くしたいと思っているのに、まただめだった。

外はいい天気が一転(いってん)して、冷たい雨が降(ふ)っていた。
彼はがっくり肩(かた)を落として、とぼとぼと通りを歩き始(はじ)めた。

彼が雨の中を歩いていると、向こうから人間に連(つ)れられた犬がやってきた。人間は傘(かさ)をさしているのに、犬はずぶ濡(ぬ)れだった。その犬が、55号の前まで来て立ち止った。

55号は、犬に訊(き)いた。

「犬君、こんなに濡(ぬ)れちゃって。僕はロボットだから平気だけど、君は大丈夫かい？人間だけレインコートを着て傘(かさ)をさして、勝手(かって)だと思わないかい？」

「……」

犬は55号の問(と)いには何も答(こた)えず、人間の後を追(お)って行った。

（本当に大丈夫かなあ。びしょ濡れの犬君、なんかさみしそうな後ろ姿だなあ。それに比べて人間の方は傘にレインコート、ずいぶん違うなあ。うちでも冷たくされていないかなあ。心配だなあ）

犬が何を考えているのかわからなかったが、55 号の心に人間の自分勝手という嫌な印象だけが残った。

雨が強くなり、人間と犬は雨のなかに消えて行った。

彼はしばらく、雨に濡れながらぽつんと立っていた。

55号がさみしくたたずんでいると、

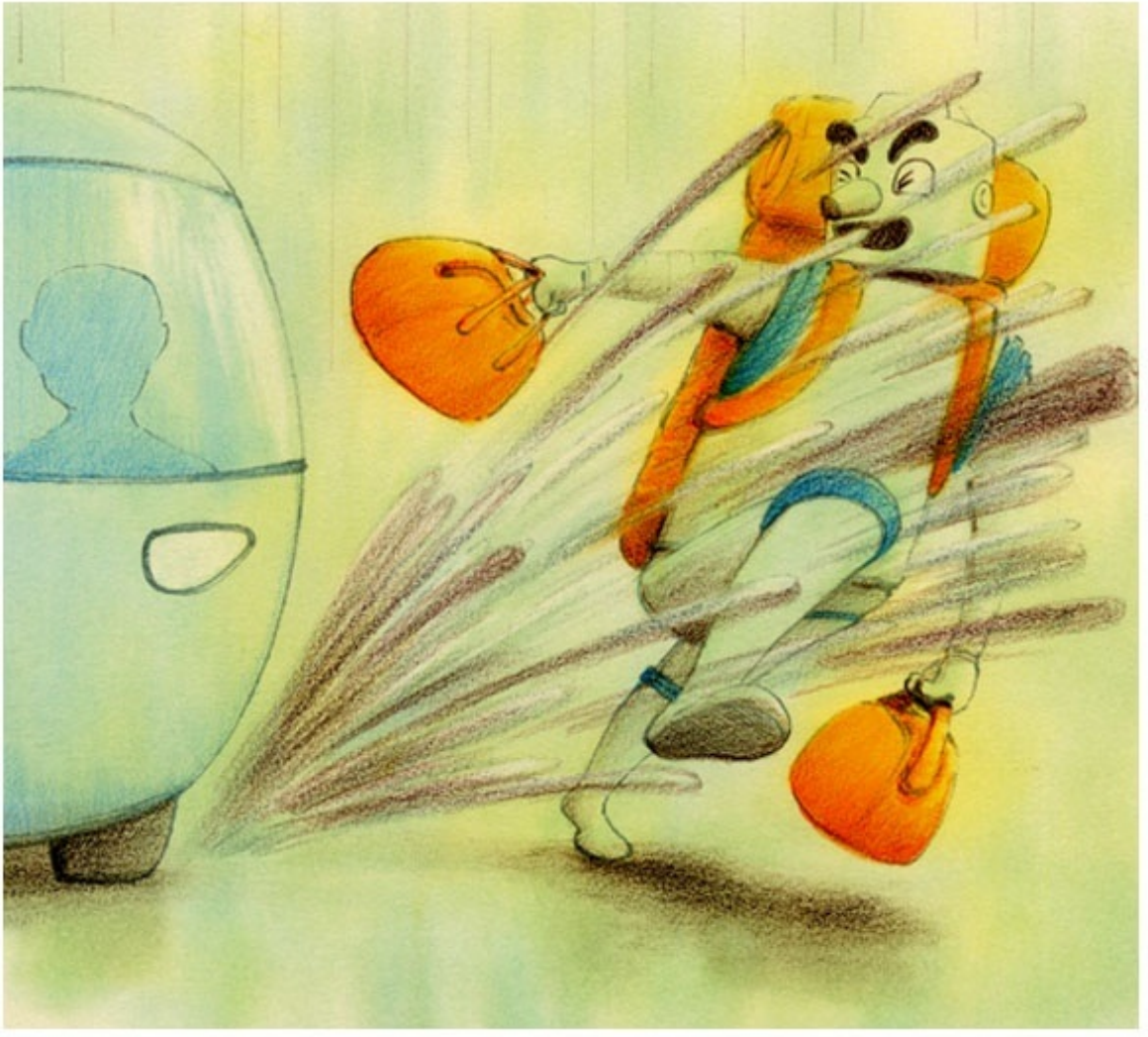
ピピピピピィー！

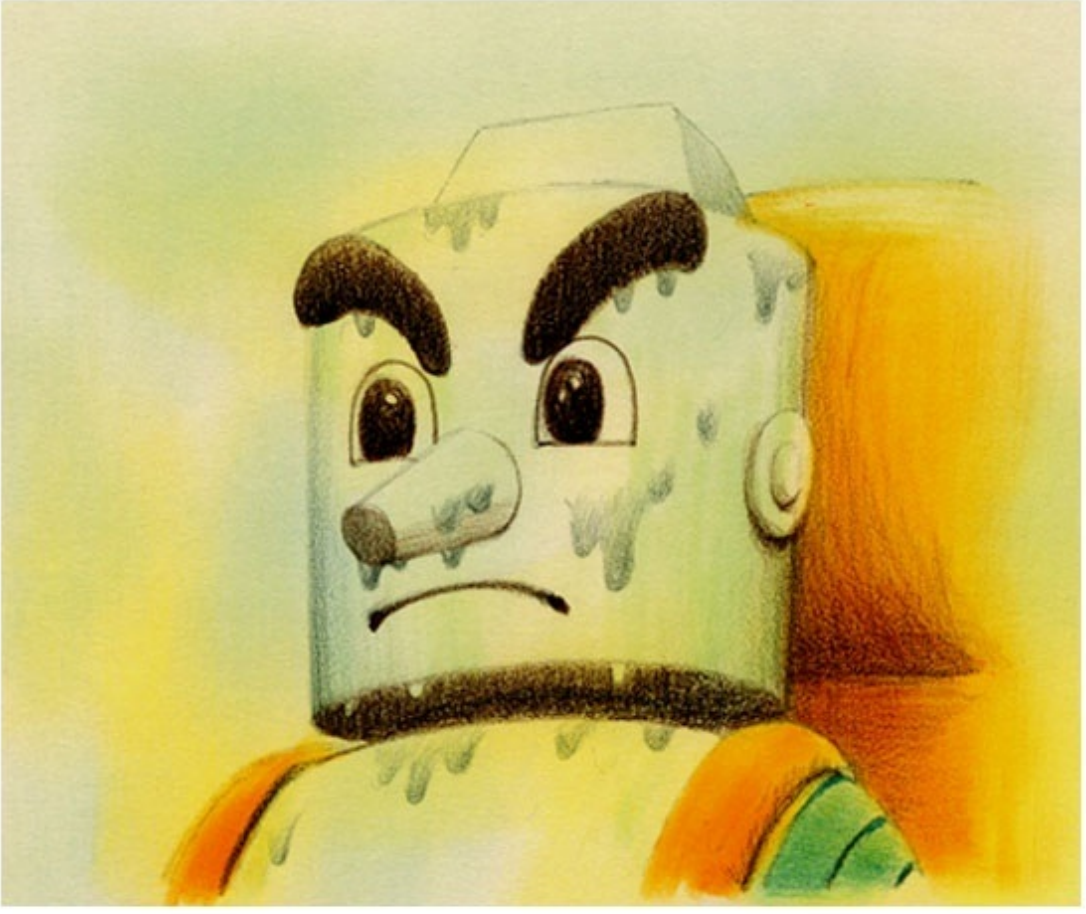
自動車が後ろからすごいスピードでやってきた。自動車は彼の横を通り過ぎる時、水溜りの泥水をはね上げた。

「うわっ！」

彼は避けることができず、泥水を全身にかぶってしまった。

自動車は、素知らぬ顔をして走り去った。





「うひゃー、ぺっぺっぺっ。口の中まで泥水(どろみず)が入っちゃったよー。ぺっぺっぺっ。まったくひどいなあ。ひどすぎるよ、あの車。……あっ、いや車じゃないんだ。そう、悪いのは、車を運転(うんてん)している人間なんだ。
泥水をぶっかけといて、ぜんぜんあやまらないで行くなんて。一歩間違(まちが)えば僕にぶつかっていたかもしれないのに。全く信(しん)じられないよ。ロボットを何だと思っているんだ」
彼は口に入った泥水を吐(は)き出しながら、ぶつくさ言って、去っていく自動車をにらんでいた。

「人間は最初にきちんとこうしてほしいと言わないで、あとでだめじゃないと怒る。なぜなんだ、まったく！

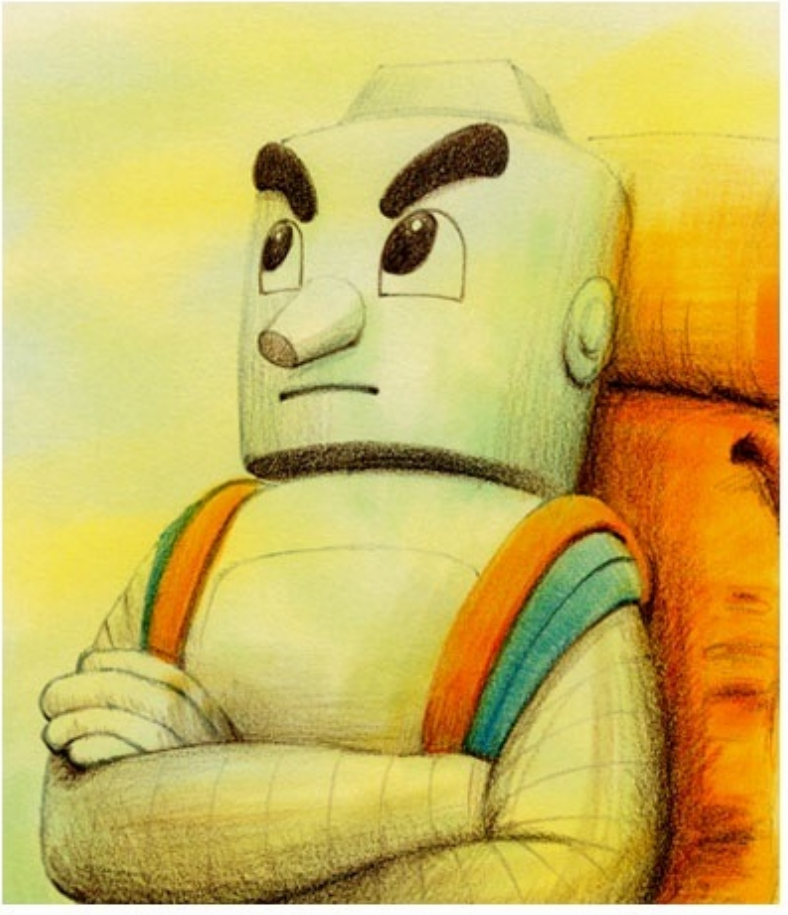
人間は雨具を用意しているのに、犬はびしょ濡れだ。動物にはやさしくない。自分勝手なんだ、まったく！

それに、人間は平気で泥水をぶっかける。それはロボットをばかにしているということだ。人間はそんなに偉いのか、まったく！」

55号は独り言を言いながら、雨の中をさみしそうに歩いていた。

背中の大きな荷物が、肩に食い込んだ。

彼はどのくらい、どこをどう歩いたかわからないほど歩いた。
冷(つめ)たい雨はいつの間にか上がっていた。
彼は雨がやんだことも気がつかず、ずっと下を向いて歩いていたが、ふと顔をあげて周(まわ)りを見渡(みわた)した。
「あぁー、なんて美(うつく)しいんだ！」
彼はもう、町からずいぶん離(はな)れたところに立っていた。
赤や黄色やオレンジ、きれいに秋化粧(あきけしょう)をした山々が彼の前に広がっていた。さらに山の上には見事(みごと)な虹(にじ)がかかっていた。



55 号は、美しい景色を見ながら考えた。

（ちょっと待てよ。

人間はすぐに怒るし、自分勝手で、ロボットをバカにする。

それなのに、僕は人間と仲良くしたいといつも思ってきた。

……

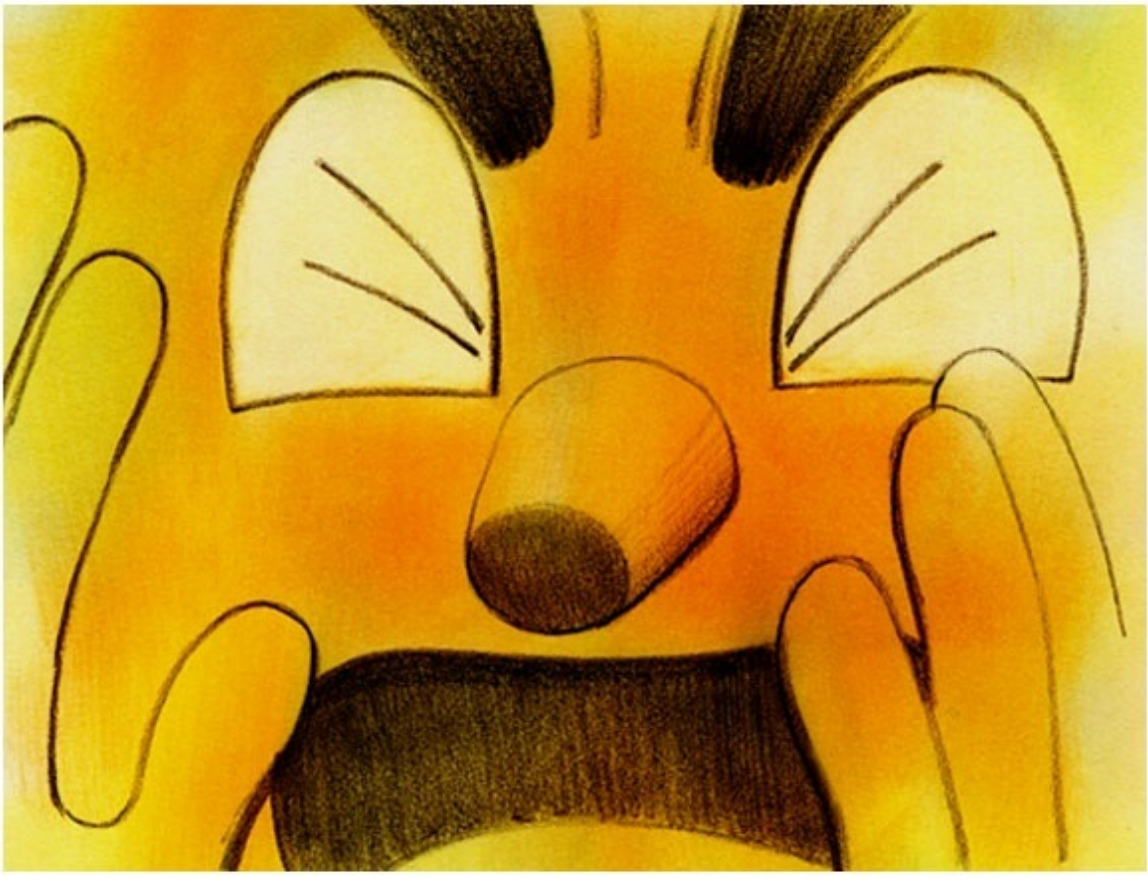
今まで僕は考え違いをしてきたかもしれない。

人間と仲良くしていいことってあるのかなあ？

僕にとってそんな人間、本当に必要なのかなあ？）

彼は腕組みをして、今までのことをじっくり考えてみた。

長い間考え込んでいた55号は、決断した。
そして、彼は町に向かって叫んだ。



「人間なんか嫌いだー。人間なんか必要ないー。これから僕はひとりで生きていくぞー。人間の住んでいる町には戻らないぞー」

彼はくるりと町に背を向け、しっかりとした足取りで山に入って行った。

2　森での生活

55号は、どんどん森の奥へと進んでいった。
さまざまな色に紅葉した木々が、彼を迎え入れてくれた。
彼は足を止め、両手を大きく広げ、胸いっぱいに空気を吸い込んだ。

「うーん、空気がおいしい」

森は静かだが、木や草、すべてのものが生き生きしていた。
彼は、ここなら一人でも楽しい生活が送れるに違いないと確信し、胸をおどらせた。

森のかなり奥に入ったところに、2本の大きな木がくっついて立っていた。その木の前は小さな広場になっていて、小川がすぐそばを流(なが)れていた。彼は両手で透(す)き通(とお)った水をすくい、一口飲(の)んだ。

「うー、うまい！こんなうまい水は初めてだ。

よしっ、ここにしょう。ここにテントを張(は)ろう」

彼はそう言って、重い荷物を下ろし、わくわくした気持ちで2本の大きな木を見上げた。

そして55号の素晴(すば)らしい森の生活が始まった。

毎日彼は、森の探検に出かけた。

木の葉の間からきらきらした朝日が差し込んでから、日が落ち葉っぱの色が分からなくなるまで、彼は森の中を歩き回った。

見るものすべてが新鮮で、彼は楽しくって、おもしろくって、いくら歩いても全く疲れなかった。

木の根元にはおいしそうなキノコや山菜が、たくさん生えていた。

木の上にも、アケビ、かき、クリなどの果実がおいしそうになっていた。

秋の森は、食べ物でいっぱいだった。

彼は、木に登ったり、岩をよじ登ったり、また小川の中を歩いたりと、森の散策を全身で満喫していた。

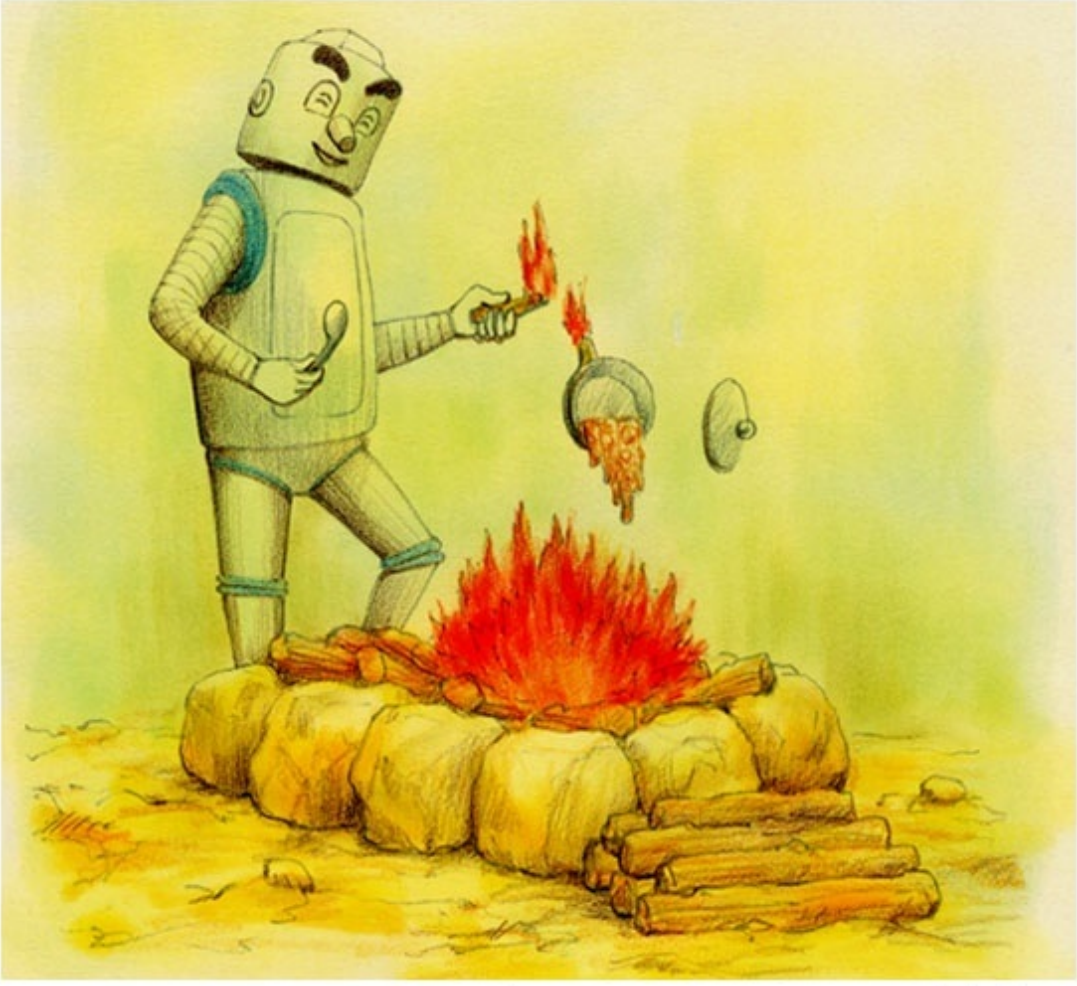
ある日、55号はテントからそう遠くないところに小さな池を発見した。

水がとてもきれいで、池の底まではっきりと見え、魚が列をなして泳いでいた。

彼はすぐに釣りを始めた。

彼は釣りをするのが初めてで、そばの小枝に釣り糸が絡んだり、釣り上げると枯れ木だったりと、なかなかうまくいかなかった。

それでも、彼はすごく楽しかった。



また、55 号は手ごろな石を集(あつ)めて、テントの前に焚火(たきび)のできる場所(ばしょ)をつくった。

彼は、採(と)ってきた山菜(さんさい)や釣ってきた魚を、そこで煮炊(にた)きして食べた。すごくおいしかった。

時には鍋(なべ)を火にかけたまま居眠(いねむ)りをしていて、鍋の中身が焦(こ)げたり、鍋の取っ手が燃えたりした。

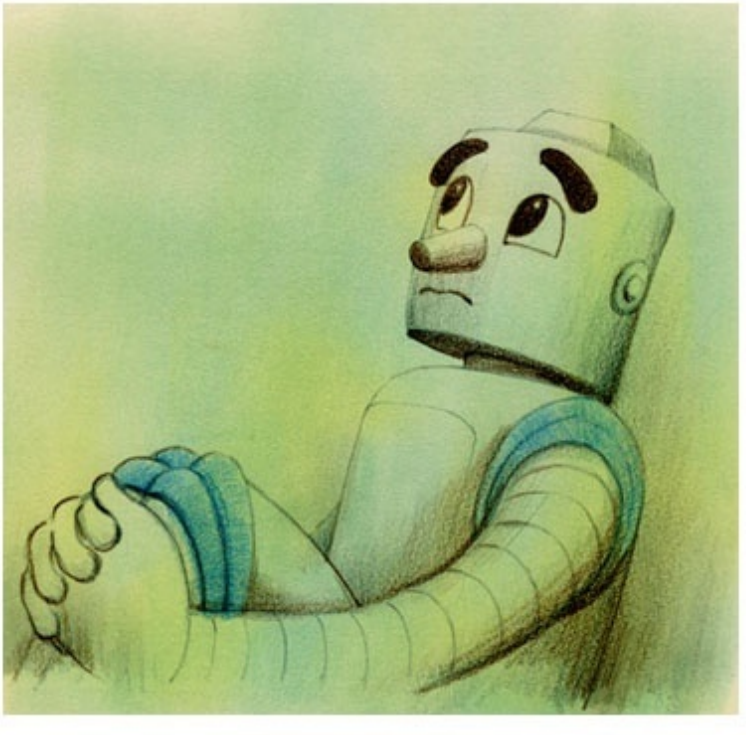
でも、彼はそれをおもしろがっていた。

町にはない楽しくてすてきな日々が続(つづ)いた。

森に入って1カ月が過ぎ、55号は森の生活にすっかり慣れた。
釣りの腕前は日増しに上達して、今ではたくさんの魚を持って帰れるようになった。また、おいしいキノコがとれる場所を、彼はいくつも見つけることができた。

しかし、彼はしだいに元気がなくなっていった。
森に来てから、寝る前に本を読むことが彼の習慣だった。
初めは森の静けさが読書にはとてもよかった。
だが、今ではその静けさが彼をとても心細くさせた。

「さみしいー。
はあー。……
さみしいよー」



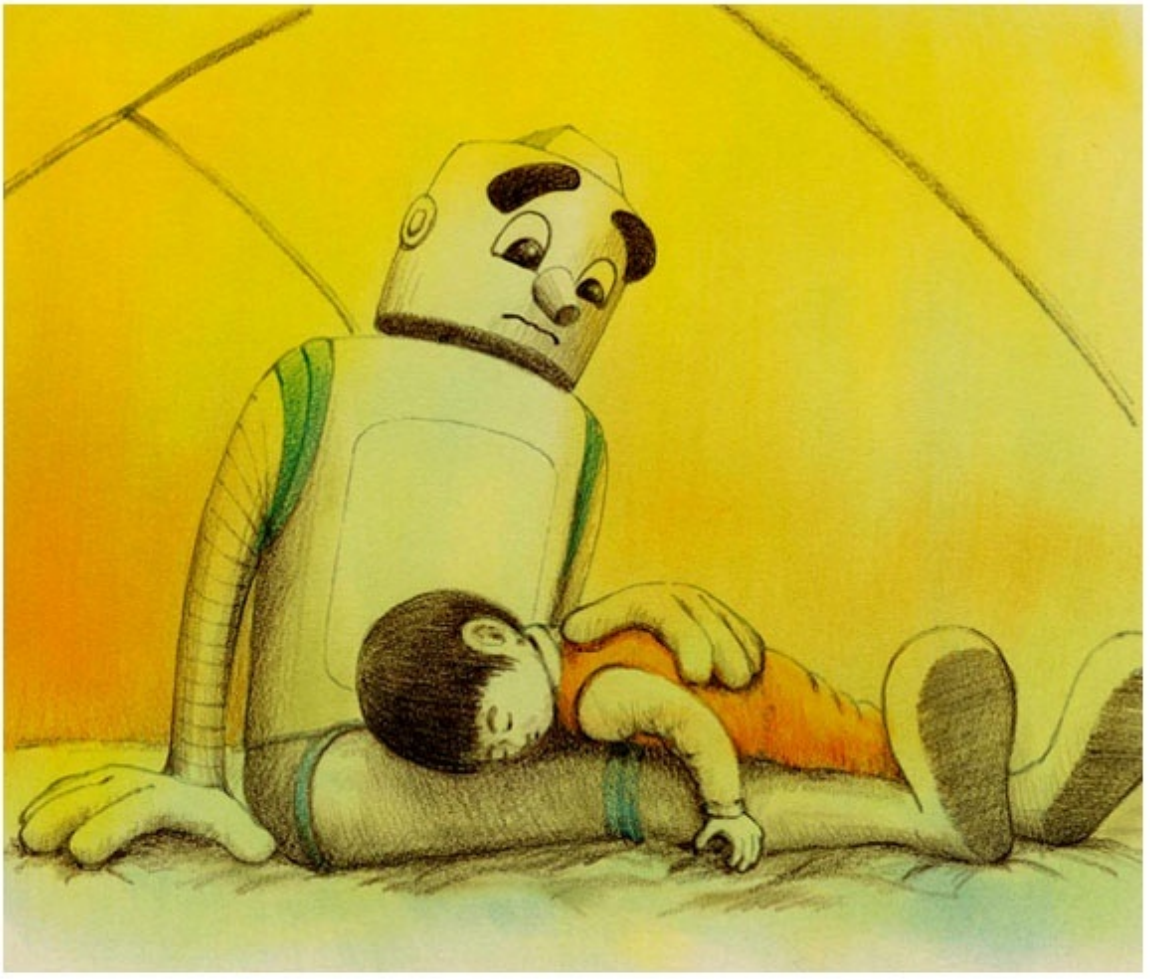
彼は、テントの中でひとり、声をあげて泣きだすこともあった。

そんなとき彼は、テントの横の大きな木に登って、遠(とお)くに見える町の明かりを夜明けまで眺(なが)めていた。

森は暗くて静かだった。時折(ときおり)、森の動物の鳴(な)き声が聞こえてくるが、55号には冷たく響(ひび)いた。森に比(くら)べ、町はきらきらと明るく輝(かがや)いていた。

あそこには嫌(きら)いな人間が住んでいるのに、見ているとなぜか彼の心は落(お)ち着(つ)くのだった。

3　太郎との出会い



ある朝、55号が目を覚(さ)ますと、5歳(さい)くらいの子供が彼の足の上で寝(ね)ていた。彼はびっくりして、子供を揺(ゆ)り起(お)そうとした。でも子供は、まったく起きなかった。

「ねぇ、君？……　　君？……　　起きて」

彼はそう言って子供を何度も揺すったが、何の反応(はんのう)もなかった。子供の様子が変(へん)なので、彼は子供の額(ひたい)に手を当ててみた。額は驚(おどろ)くほど熱(あつ)く、この子は病気(びょうき)のようだった。

55号は人間を嫌(きら)っていたので、この子にもあまり関(かか)わりたくなかった。

彼はしばらく何もしないで、じっと子供の背中を見ていた。

彼の足から子供の熱(あつ)い体温(たいおん)が伝(つた)わってきた。

「うぅぅぅーん、うぅぅぅぅーん」

子供がうめきだした。

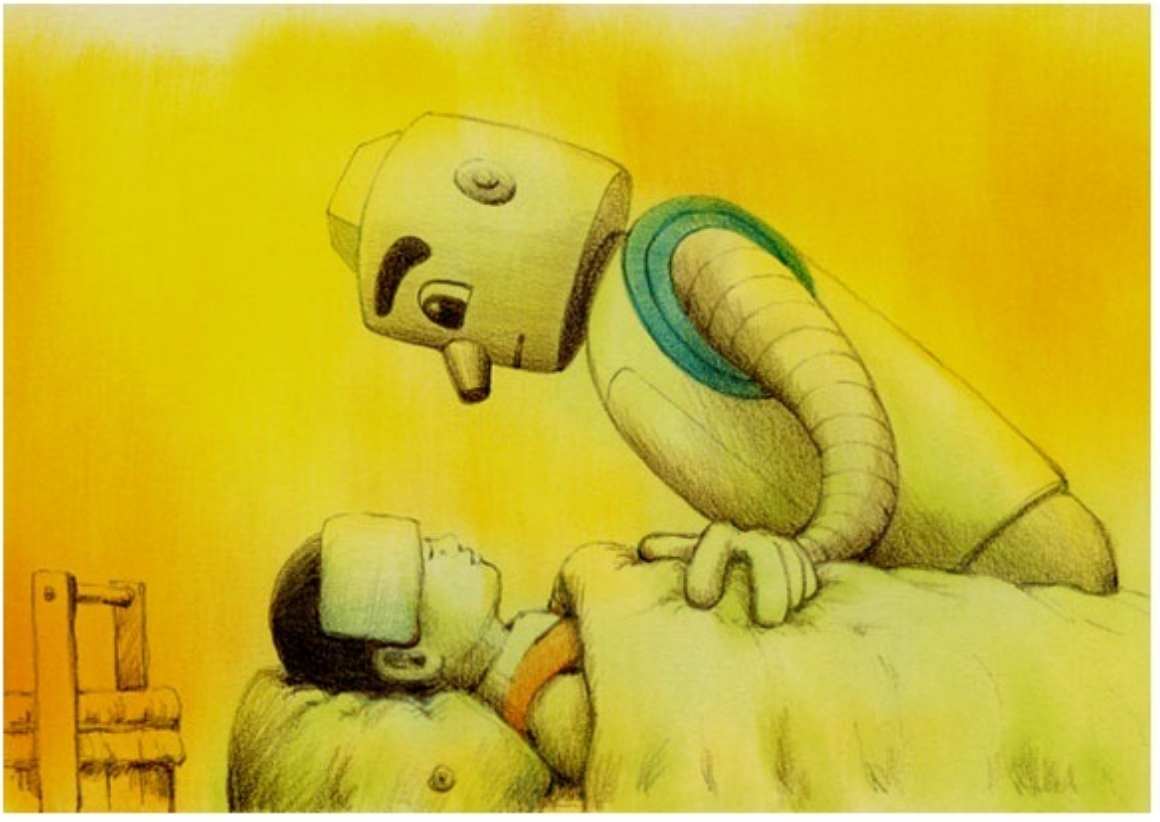
（どうしたらいいんだ）

彼は大変困(こま)ってしまった。

「うぅぅぅーん、うぅぅぅーん」

「うぅぅぅーん、うぅぅぅぅぅぅーん」

そして、55号は嫌(きら)いな人間であってもこのままにはしておけないと思った。



55 号は、子供に毛布(もうふ)をかけ、ぬれタオルで頭を冷やしてやった。彼は、何回も小川に行って冷たい水を汲(く)み、寝(ね)ないでタオルを取り換(か)え看病(かんびょう)した。

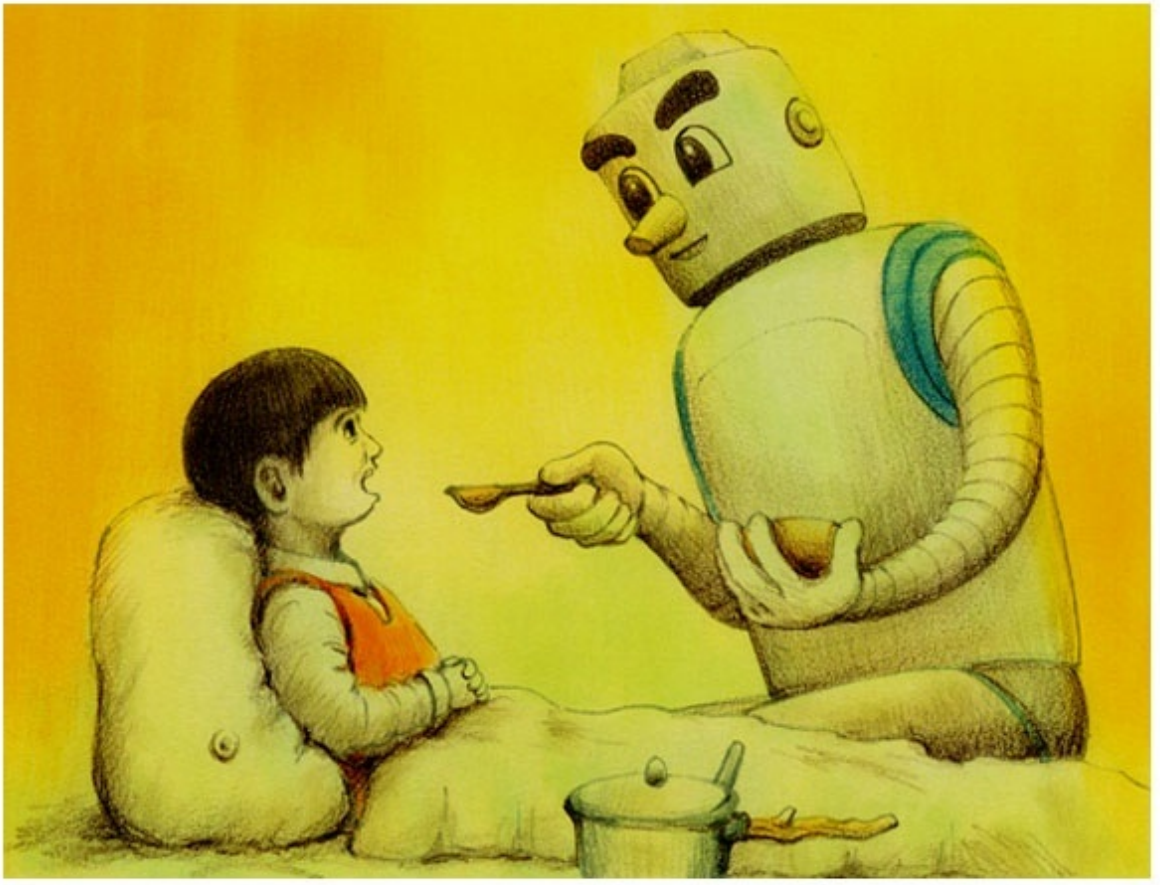
子供は、二日してやっと熱が下がり、目を覚ました。

その子は、ぼう然と黄色いテントの上の方を見ていたが、そばにいる 55 号に気がつき、

「おなかがすいた」

と、無邪気(むじゃき)にしゃべった。

初めて話した言葉(ことば)がおなかがすいたか、と 55 号は思って苦笑(くしょう)したが、それを聞いてほっとした。



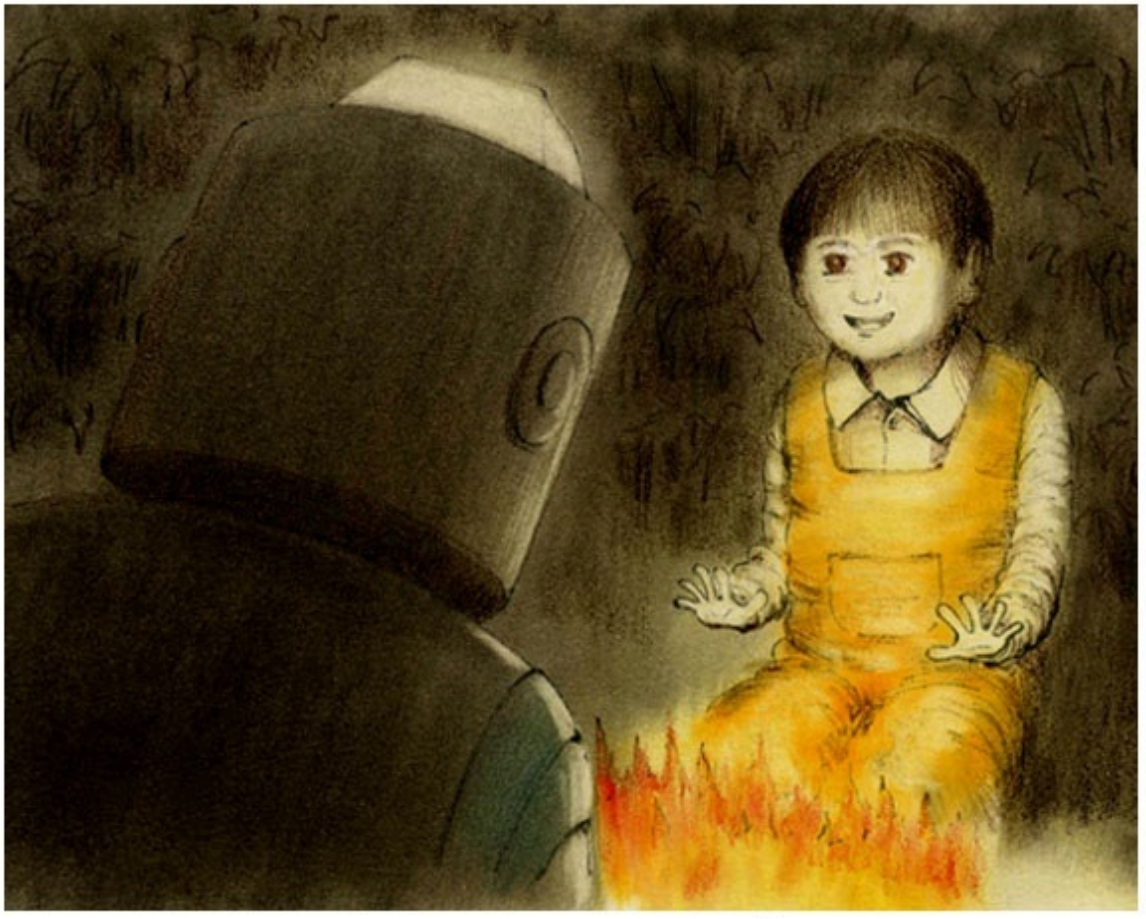
55号はさっそく魚や山菜を料理(りょうり)して、子供に食べさせた。
その子は、パクパクとおいしそうに食べた。

子供は食べながら、自分の事を少しずつ話し始めた。

名前は太郎で、パパたちとキャンプに来て、一人遊んでいるうちに迷子(まいご)になったらしい。
そして、太郎は3日間何も食べずに森の中を歩き回り、この黄色いテントを見つけて転(ころ)がり込(こ)んだようだ。

太郎が倒(たお)れ込んで来てから5日が経(た)った。
太郎はモリモリ食べて、すっかり元気になった。

55号と太郎は、焚火(たきび)にあたりながら話をした。



「55号さんは、どうして一人森の中で暮(く)らしているの？」
「どうしてって、それは、……」

55号は言いよどんだが、少し間をとってから続けた。

「僕は家事(かじ)手伝いの仕事をしているんだ。おうちの掃除(そうじ)、洗濯(せんたく)、料理(りょうり)や食器(しょっき)のかたづけなどをしているんだ。
僕は言われた仕事はちゃんとやっているのに、家の人はすぐ怒るんだ。それに、人間は、動物を冷たく扱(あつか)うし、ロボットも物のように思っている。

だから、人間が嫌いになって、人間のいる町から離れ、森に住むことにしたんだ」

「ふーん、そうなんだ。

でもね、世の中にはいろんな人がいるんだって。優しい人、正直な人、嘘をつく人、すぐ怒る人、いろいろ。パパがそう言ってたよ」

「……」

「僕も人間だよ。僕のことも嫌い？」

「……」

55号は太郎の質問には答えず、焚火を見ていた。

薪は勢いよく燃えていた。

55 号は、太郎の言ったことを考えていたが、よく理解(りかい)できなかった。しばらくして、彼は顔(かお)を上げ、

「また迷子(まいご)になったら大変だから、僕が君のパパのところまで送って行くよ」

と言って、太郎と約束(やくそく)をした。

太郎は 55 号の顔を見ていたが、一方 55 号はまた下を向き、火のついた薪(たきぎ)を動かしていた。

2 本の大きな木は、二人の話を静(しず)かに聞いているようだった。

次の日、55号と太郎はパパを探(さが)しに出発(しゅっぱつ)した。

太郎の話を聞いて、パパたちがキャンプをしていたのは、西の二つの山を越(こ)えたところの河原(かわら)だろうと、55号は推測(すいそく)した。

二人は何もしゃべらず、55号がどんどん森の中を進み、太郎は5，6歩後をついて行った。

そのうち太郎は、55号の横に来て左手を握(にぎ)った。55号はちょっと変(へん)な気がしたが、そのままにして歩き続(つづ)けた。

55 号は、急な坂や大きな段差のあるところは避けて、太郎の少しでも歩きやすい道を進んだ。また、道に張り出した小枝で太郎がけがをしないように、彼は注意を払った。彼は、太郎を無事にパパのところへ連れて行くという約束を、常に考えて行動した。約束したことは守らなければならない。55 号はやはり、正確に動くロボットなのだ。

太郎は、しだいに 55 号と森の中を歩くのに慣れてきたのか、幼稚園でのゆかいな話をするようになった。
でも 55 号は、黙ってそれを聞くだけだった。

二人がけもの道のような細(ほそ)い道を歩いていると、折(お)れて倒(たお)れた木が道をふさいでいた。55 号はその木を踏(ふ)もうとした時だった。

「あっ、その木を踏(ふ)んじゃ、だめっ！」

突然(とつぜん)、太郎は叫(さけ)んだ。

「その木の下に、花が咲(さ)いているんだ。踏(ふ)んだら花がつぶれちゃうよ」

折れて横(よこ)たわった木の下には、ふたつの小さなかわいい花が仲良(なかよ)く咲いていた。

「ママは、家の前や幼稚園にたくさんの花を植えているんだ。花はきれいだけど弱い生き物だから、大切にしてあげなさいって、いつも僕に言うんだ」

太郎はそう話しながら、倒れた木を花から遠ざけようとした。55号も黙ってそれを手伝った。

「それからね、ママは、自分が植えた花を見ると、にこにこ嬉しそうな顔になるんだ」

と、太郎は付け加えた。

太郎は安全になった花の前にひざをつき、顔を近づけて、

「もうこれで安心だよ」

と言って、優しく花びらを触っていた。

二人はまた、並んで歩きだした。

「太郎君のママは、優(やさ)しい人だね」

55 号は、テントを出てから初めて太郎に話しかけた。

「うん、優(やさ)しいよ。でもいたずらをするとすごく怒(おこ)るよ」

55 号はそれを聞いて、真面目(まじめ)な顔で尋(たず)ねた。

「太郎君は、怒(おこ)られてママを嫌(きら)いにならないの？」

「ママを嫌(きら)いになったことなんかないよ。ママが怒るのは僕が悪いんだから」

太郎はそう答えると、また幼稚園の楽しい話を始めた。

55 号は太郎の返事(へんじ)の意味を考えながら、黙(だま)って歩いた。

二人は3時間ほど歩いただろうか、水の流れている場所に来た。そこは、太陽の光がたっぷりと注(そそ)いで明るく、流れる水は清(きよ)らかだった。

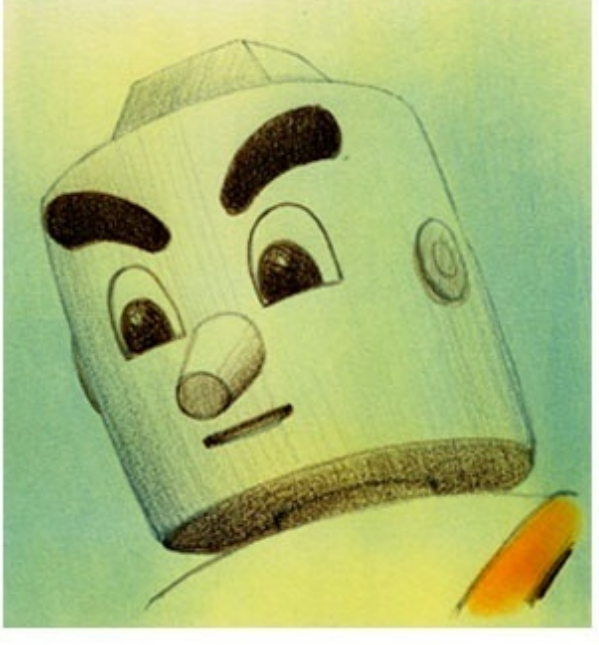
55号はすばやく釣(つ)りの道具をつくり、釣りを始めた。

太郎は、裸足(はだし)になって小川に入り、両手で水をすくってはあちこちにまき散(ち)らし、楽しそうに遊(あそ)んでいた。

そして、太郎は水の中から靴(くつ)や長い布を拾(ひろ)い上げ、55号に見せて言った。

「水は世界中をグルグル回っているんだって。だから、水の流(なが)れている川をきれいにすると、自分のところにもきれいな水が流れてくるんだって。パパがそう言ってたよ」

55号は、釣り糸の垂(た)れているあたりを見ながら、
「ふーん、……」
と、よそよそしい気持ちでつぶやいた。



小川は秋の光を受けてきらきらかがやき、静(しず)かに流れていた。

55号は、上達(じょうたつ)した腕前(うでまえ)

であっという間に5、6匹の魚を釣った。そして彼は火をおこし、釣った魚を木にさして食事の用意をした。太郎も火の前に座(すわ)り、魚の焼(や)けるのを楽しみに待(ま)った。

魚はおいしそうに焼け、いい匂(にお)いが二人を包んだ。

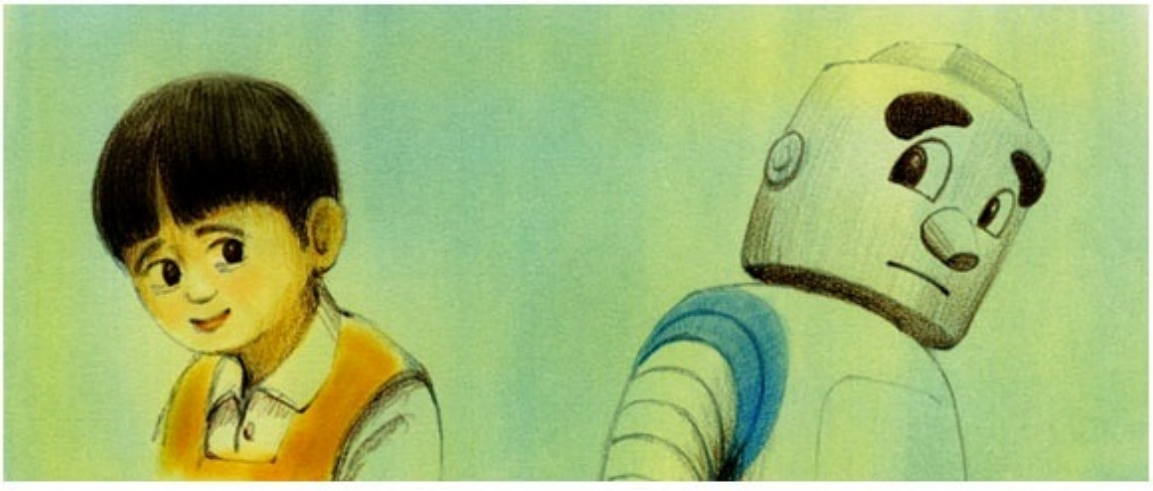
太郎は大きく鼻(はな)をふくらませて、うまそうな匂いをいっぱい吸(す)うと、

グゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーッ

太郎のおなかが大きく鳴(な)った。太郎は恥(は)ずかしそうにおなかを押(お)さえ、体を小さくした。すると、

グゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥーッ

今度は55号のおなかが鳴った。



二人とも思わず顔(かお)を見合わせた。だんだんとおかしさがこみ上げてきて、笑い声が飛び出した。

「あっはははははははは一、あっはははははははは一」

「わっはははははははは一、わっはははははははは一」

おなかを抱(かか)えて笑っていると、太郎が枯(か)れ木から後ろにずり落ちた。それで二人の笑い声は、もっと大きくなった。

「あっはははははははははははは一、わっはははははははははは一」

食べることを忘(わす)れるくらいに、二人の笑いは止まらなかった。

55 号も、太郎と同じように、えんりょなく腹(はら)から笑った。こんな大笑いしたことは、今までになかった。

胸(むね)の中に溜(た)まっていたもやもやが消(き)え、55 号はすっきりした気持ちになった。

「太郎君、ほーら、おいしそうに焼(や)けたよ」

55号が焼けた魚を太郎に差(さ)し出した。
太郎は小さな両手を合わせて、

「いただきまーす」

と、元気な声で言った。

「はい、どーぞ」

と、55号はにっこり笑って手渡(てわた)した。
太郎と55号は思いっきり焼き魚にかぶりついた。

「うまーい！」

二人の声は、ぴったりそろっていた。二人は、食べながら笑い、笑いながら食べた。
二人はすっかり打ち解けて、幼稚園での出来事やパパママの話で、笑い声はいつまでも止むことがなかった。
焼き魚だけの食事だったが、こんなに楽しい食事は 55 号にとって、生れてはじめてだった。

（森の中でひとり生活をしていると、こんな楽しい食事ができるだろうか？）
と、彼は森で暮らしていくことに少し疑問を感じた。

4　オオカミから逃(に)げる

二人が楽しく話している時、55 号は何気(なにげ)なく小川の向こうの林の中に目をやった。

林の奥(おく)でホタルほどの小さな光が、いくつも目に入った。
それらは対(たい)になって動いていた。55 号は不思議(ふしぎ)に感じ、全神経(しんけい)を集中(しゅうちゅう)してその闇(やみ)を見続(みつづ)けた。
その何ものかの一部に、細く差(さ)し込(こ)んだ日の光が当たった。
「あつ！」

55 号は、それが何なのかすぐにわかった。

林の中には 10 頭ほどのオオカミがうごめいていた

55号は、太郎に小さな声でオオカミのことを教えた。
太郎はそれを聞くや否や、前の火を飛び越えて55号のかたわらにしがみついた。

「えっ！あそこにいるの？
オオカミっておそろしいんでしょ？」
「太郎君、大丈夫だよ。
僕は、君をパパのところまで連れていくって、約束しただろう。僕はロボット。ロボットは嘘つかない。必ず連れて行ってあげるから、心配ないよ」

55号は正直言って自信がなかったけど、太郎を元気づけるためにそう言った。

オオカミは、太郎を狙(ねら)ってじわじわと近づいていた。もう数頭のオオカミは、林の暗闇(くらやみ)からゆっくりとその姿(すがた)を現(あらわ)した。体は大きく、獲物(えもの)を狩(か)るぎらぎらした殺気(さっき)が顔に出ていた。

55 号はまず自分自身を落(お)ち着(つ)かせ、どうすればいいのか、あたりを見ながら考えた。

そして、太郎が小川から拾(ひろ)ってきた赤い長い布を見つけた。

（そうだ、これを使おう）

55 号は急いで太郎を背負(せお)い、その布で落ちないように幾重(いくえ)にも巻(ま)いた。

55号は背中の太郎に言った。

「太郎君、しっかりつかまっていてよ」

太郎は不安な気持ちで、55号の肩(かた)をしっかりとつかんだ。

ダダダダダダダダダダダダダダダッー。

55号はものすごい勢(いきお)いで走りだした。

オオカミは二人が走り出すのを見て、次々と林の前の小川を飛(と)び越(こ)えた。

オオカミの執拗(しつよう)な追跡(ついせき)が始(はじ)まった。

55号は右に左に木々を避(さ)け、低い木は一気(いっき)に飛び越(こ)え、無我夢中(むがむちゅう)で走った。

ブーン、ブーンと木はうなり、シュシュッ、シュシュッと草はざわめいて、後ろにすっ飛んで行った。

二人は斜面(しゃめん)を上がったり下がったり、小川の中も水を蹴散(けち)らして爆走(ばくそう)した。

55号は、とても速(はや)く走る能力(のうりょく)があった。

でも、追っかけてくるオオカミも速かった。

サササササー、サササササー。

森に住んでいるオオカミの走りは素晴らしく、木や枝の方が避(さ)けているかのようだった。

55号は何度も後ろを確認(かくにん)しながら逃(に)げた。オオカミと目が合った時、55号は走りながら恐(おそ)ろしさで寒さを感じた。

そして、オオカミは驚異的(きょういてき)な粘(ねば)りを持っていた。

オオカミの猛烈(もうれつ)な勢(いきお)いは、一向(いっこう)に衰(おとろ)えることがなく、走っても走っても、55号はオオカミを振(ふ)り切ることができなかった。

背中に乗っていた太郎も、55 号同様に大変だった。

二人をしっかり結(むす)び付けていた赤い布は、しだいにゆるんできた。

55 号が上下左右に激(はげ)しく動くたびに、太郎は背中の上で飛んだり跳(は)ねたりしていた。

太郎はだんだんと 55 号の無茶な動きに慣(な)れてきて、まるで暴(あば)れ馬に乗ったカウボーイのようになった。

暴れ馬は、オオカミに食べられまいと森の中を駆(か)け回り、カウボーイは、振り落とされまいと必死に赤い手綱(たづな)を握(にぎ)った。

55 号は、オオカミの粘っこい追跡から逃れようと、一生懸命に走った。そして 55 号と太郎は、いつの間にか林を抜けて、隠れるところがないがけの上に出た。オオカミもすぐに追いついた。

がけは、目が回るほどの高さがあった。

オオカミは、二人の逃げ場がないように取り囲んだ。

二人の前には、牙をむきよだれを垂らしたどうもうなオオカミ、後ろには、落ちればきっと死ぬだろう危険ながけ。

オオカミは、絶対(ぜったい)の自信を持って、じりじりと二人を追い詰(つ)めて行った。

55 号は一歩一歩すりながら後ろに下がった。彼のかかとは、とうとうがけの端(はし)まで来てしまった。

カォーン、カォーン、

カォーン、カォーン……。

かかとにあたった小石が、何度か岩にぶつかって谷底に落ちていった。

最後(さいご)の音は聞こえなかった。

恐怖(きょうふ)で震(ふる)えていた太郎は、それを見てさらに震えた。

オオカミは、あとひとっ飛びの距離(きょり)まで来ると動きを止め、襲(おそ)いかかるタイミングをはかっていた。55号もオオカミも、全く動かず、時間だけが流れた。

がけの上は、ピリピリした緊張感(きんちょうかん)に包(つつ)まれていた。55号は、オオカミを刺激(しげき)しないように、落ち着いて、そして静(しず)かに太郎を布でしっかりとしばり直した。

「太郎君、下を見ないで僕(ぼく)につかまっていてよ」
と、55号は肩越(かたご)しに言った。太郎は、のどがカラカラに乾(かわ)いて声が出せなかったが、55号の肩を力いっぱい握(にぎ)った。

ダダッ！

突然(とつぜん)、オオカミは地をけって二人に飛びかかった。

すると、55号はがけからひらりと後ろ向きに飛び降(お)りた。

オオカミの何頭かは、勢い余って55号の頭上を越えて、谷底へ落ちて行った。

太郎は、飛び降りた瞬間、目を閉じて、体をこわばらせた。

（えっ、うそーっ、なんで飛び降りちゃうのー？

あぁーもう死んじゃうー。

パパママ　もう一度会いたかったよー。　悪いことばかりしてごめんよー。でもなんでー）

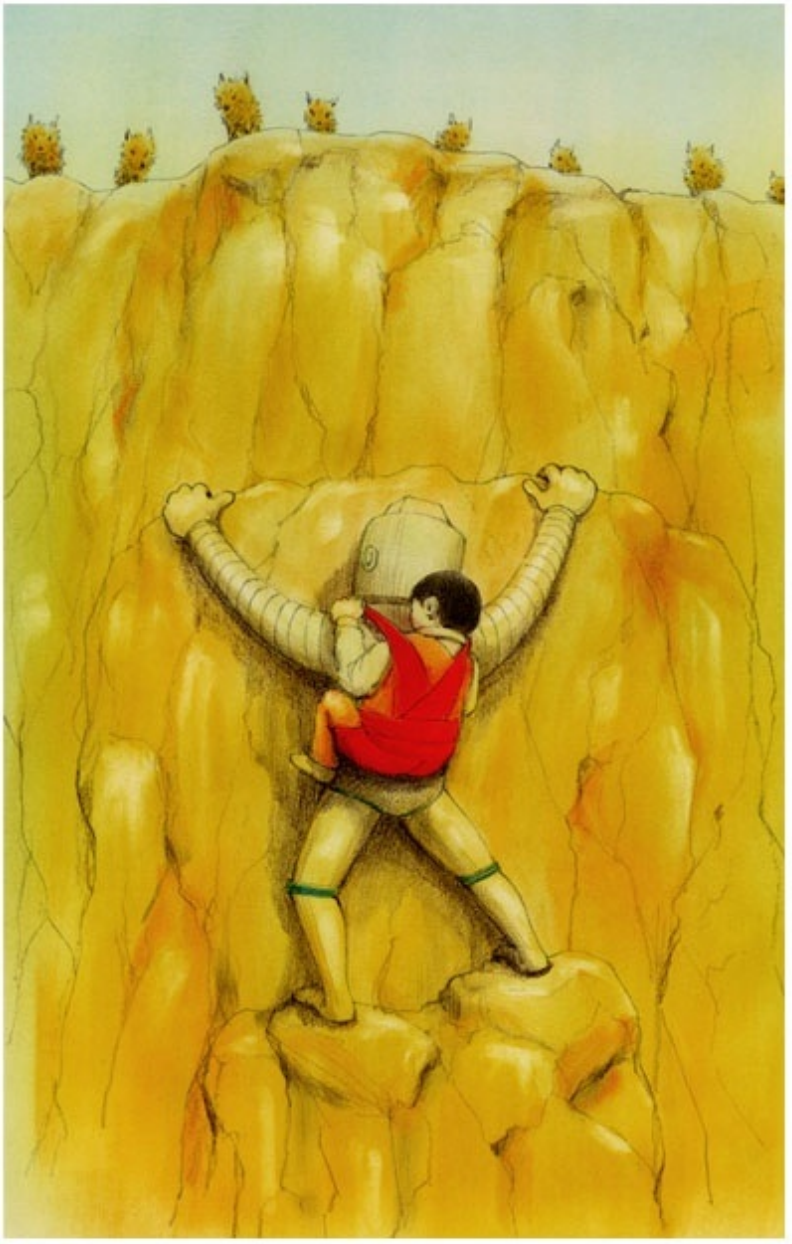
ガシッ！

「ん？」

落ちる二人はすぐに止まった。

太郎は不思議(ふしぎ)に思い、ゆっくりと目を開けた。

55 号はしっかりと岩をつかみ、がけの途中(とちゅう)に張(は)り付いていた。



55 号は、この森に入ってから何度もこのがけを登ったり降りたりしていた。

だからこのがけは、55 号にとってまったく危険(きけん)な場所ではなかった。

55 号は、オオカミを振り切ろうと必死(ひっし)になって走っているときに、このがけのことを思い出し、これを利用して逃げようと考えたのだった。

オオカミは残念(ざんねん)そうな表情(ひょうじょう)で、がけの上からのぞいていた。

「太郎君、もうオオカミは追いかけて来ないから安心だよ」

「あー怖(こわ)かった。死んじゃうかと思った」

太郎は、ほっとして全身の力をゆるめた。

「さあ、ゆっくり降(お)りよう」

「うん」

悔(くや)しそうなオオカミを後に、二人は慣(な)れたコースで降りて行った。

5　やっぱり人間と仲良(なかよ)くしたい

二人は高い高いがけを降りてくると、大きな河原(かわら)に出た。水はほとんどなく、石ころだらけだった。太郎よりも大きな石がたくさんころがっていた。

55号は、太郎には歩きにくいと思い、背負(せお)ったまま歩いた。
晩秋(ばんしゅう)だが、この日はポカポカと暖(あたた)かだった。
太郎は、恐(おそ)ろしいオオカミから無事逃げられて安心したのか、55号の背中で寝(ね)てしまった。

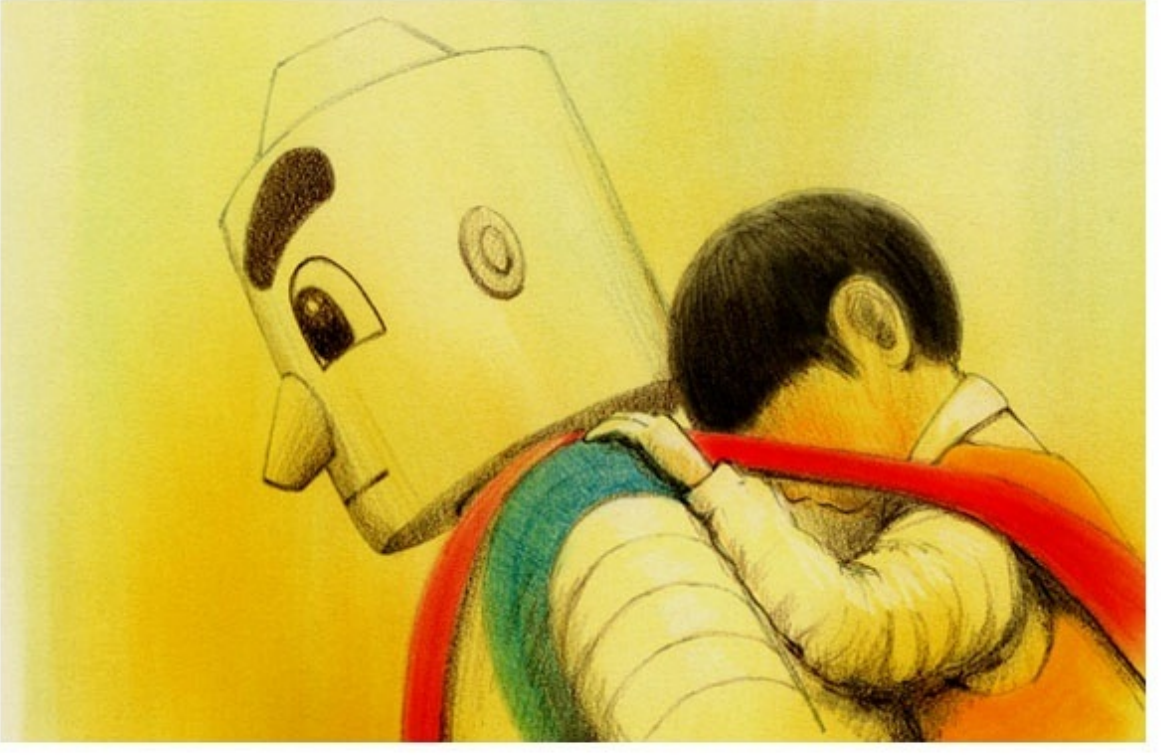
太郎はよく寝(ね)ていた。

足元は大きな石ばかりなので、55 号は寝ている太郎をおこさないように、注意しながらゆっくりと歩いた。

55 号は、太郎の心地よい重さを感じながら、

（この子は本当にいい子だなあ。友達(ともだち)になれたらなあ）

と、思った。



そして、55 号は人間のことをじっくり考えてみた。

（僕(ぼく)は、人間がすぐに怒(おこ)るものだと決めつけていたけど、本当にそうなのかなあ。

この世界には、悪い人間ばかりでなく、太郎のようないい人間もいるんじゃないかなあ）

（太郎君が、ママが怒るのは自分が悪いことをしたからだと言っていた。僕の場合はどうなんだろうか？お皿だけ洗ったがコップはそのままにしていた。洗濯(せんたく)ものを洗ったが乾(かわ)かさなかった。床を拭(ふ)いたが紙くずは拾(ひろ)わなかった。あの時怒られたのは、僕の方にもきっと悪いところがあったのだろう。

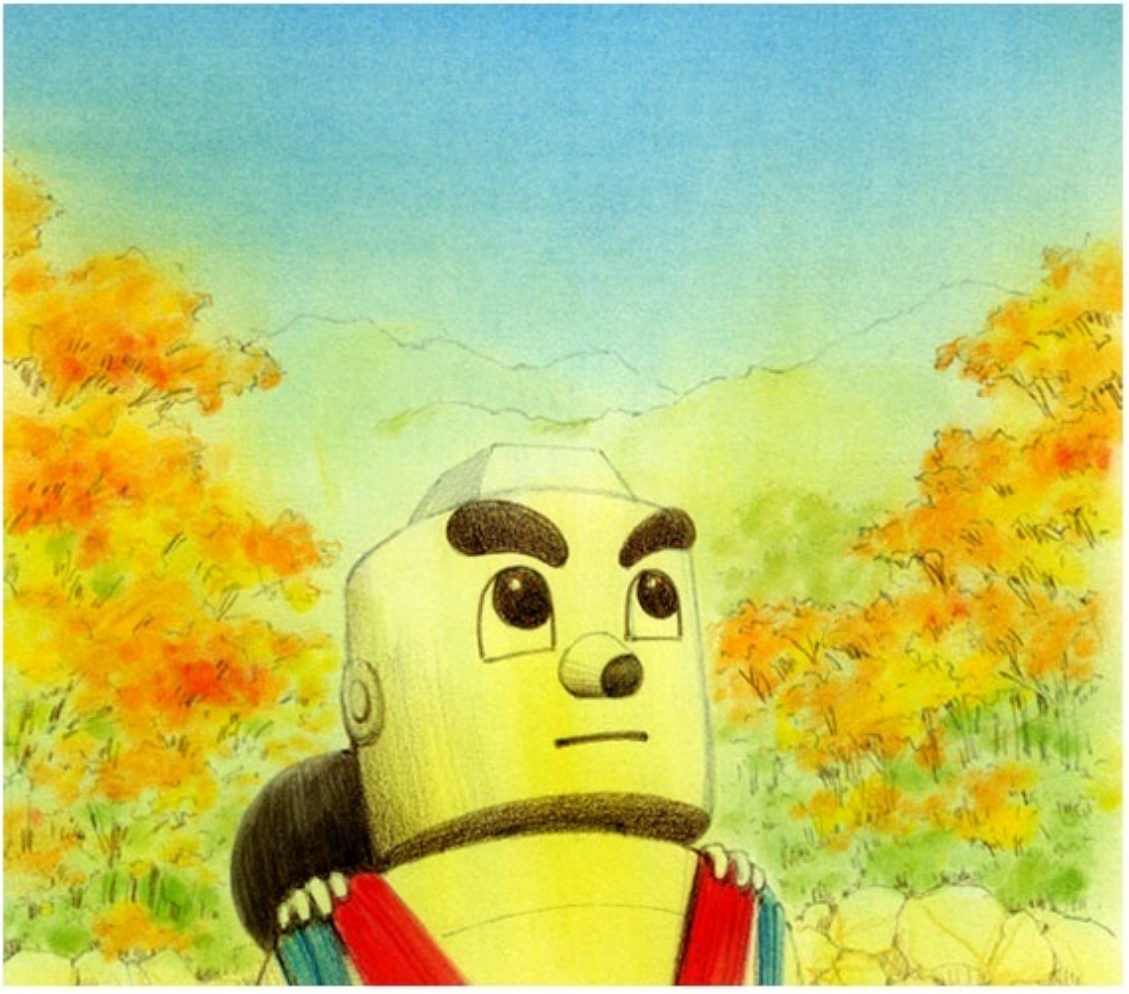
また、雨の中、ずぶ濡(ぬ)れになった犬がいた。人間だけはレインコートを着て傘をさしていた。犬は人間にそうさせられていると僕は思っていた。でも、一度は人間に雨具を着(き)せてもらったが、犬の方が嫌(いや)がって脱(ぬ)いだのかもしれない。

それから、道路に立っていた僕は、後ろから来た自動車に泥(どろ)をひっかけられた。あの時僕はもっと道路の端(はし)に寄(よ)

っていれば、泥をかぶらずに済(す)んだのではないだろうか。）

55 号は、つまずかないようにゆっくり歩き、今までのことを思い返していたが、ふと立ち止って空を仰(あお)いだ。

空は、透明感(とうめいかん)のあるきれいなブルーだった。



55 号は、この青空を見ていると、人間に対しての嫌(いや)な考えが消え、心がどんどんきれいになっていくような気がした。

そして、55 号は思った。

（やっぱり人間と仲良くしたいなあ）

雲ひとつない青空のように、心がすっきりした55号は、石だらけの河原をまた歩き始めた。

だんだんと河原には大きな石が少なくなり、55 号はずいぶんと歩き易くなった。河原の両側の紅葉した木々が、秋の青空と一緒になって、55号を楽しませてくれた。

「あっ、あそこにほら穴があるよ」

太郎は、55号が知らないうちに目を覚ましていた。

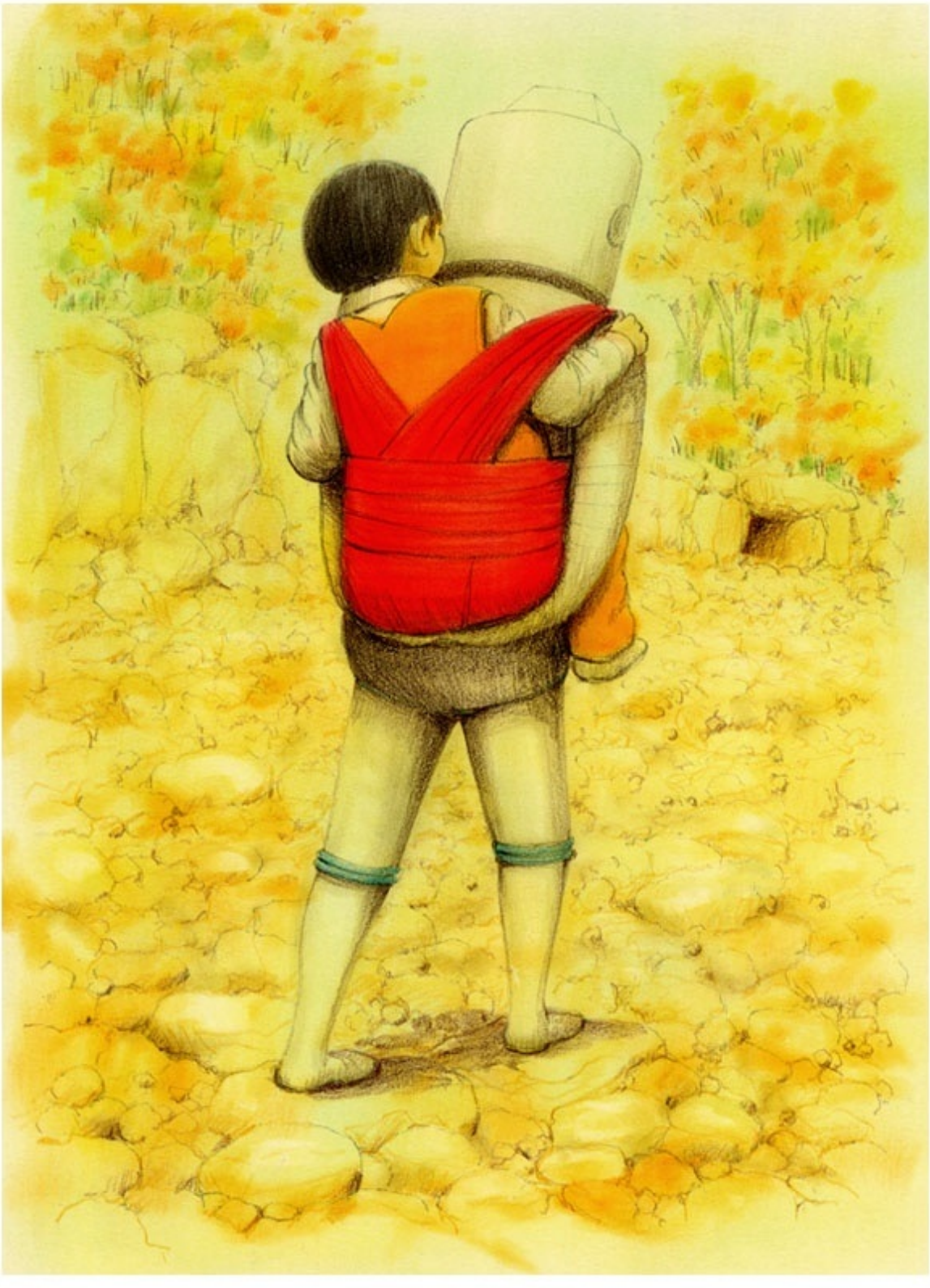
「あのほら穴に入ってみたいなあ」

と、太郎がパパにせがむように言った。

「そうだね、なかで少し休んで行こう」

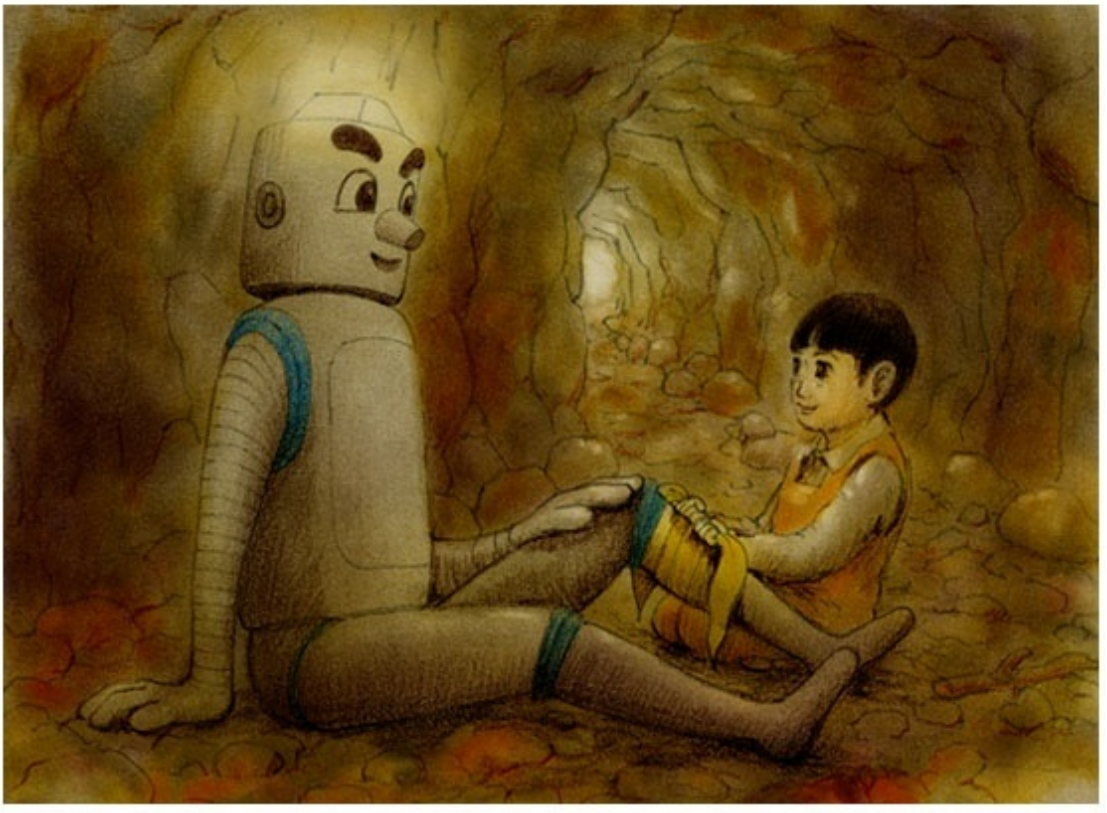
55号も賛成して、二人はほら穴のほうへ向かった。

後ろ姿(すがた)から、二人は本当に仲のいい友達(ともだち)に見えた。



6　ほら穴の中で

ほら穴はかなり奥が深く、入口は狭いのだが徐々に広くなっていた。奥のほうは薄暗いので、55号は頭のライトをつけた。二人は手をつなぎ、好奇心いっぱいで奥まで行って腰を下ろした。



森の中をがむしゃらに走ったので、55号の左足には大きな傷ができていた。太郎は黄色いハンカチを取り出し、傷のところをやさしく巻きながら、心配そうにたずねた。

「痛くないの？」

「このくらいは大丈夫だよ。ありがとう」

55号は、にっこり笑って答えた。

「オオカミに追(お)いかけられた時は、本当に怖(こわ)かった」

と、太郎はさっきのことを話し始めた。

「しばっていた布がゆるんじゃって、右や左に、もう落っこちそうになって、大変だったよ。でも、だんだんと慣れて来て、赤い布をこう持って、それからこうやってね、ほんとカウボーイみたいな気分になったよ」

と、身振(みぶ)り手振(てぶ)りで興奮(こうふん)して話した。

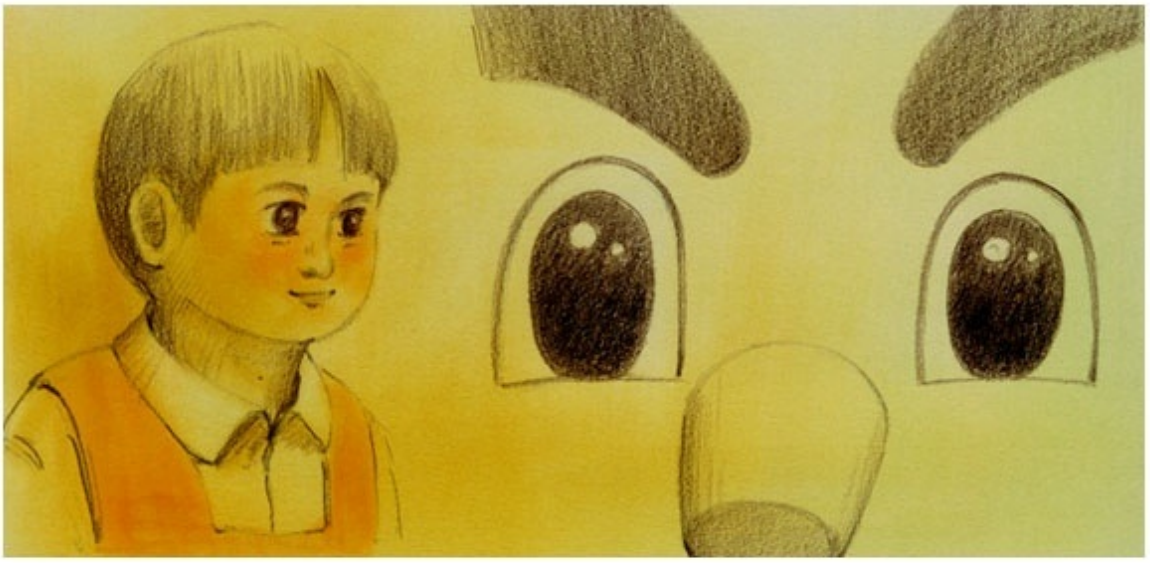
55号はにこにこしながら、相(あい)づちを打って聞いていた。

二人が仲良く話をしていたら、突然(とつぜん)大きなクマがほら穴に入ってきた。55号はびっくりして、急(いそ)ぎライトを消した。

クマは55号の倍(ばい)ほどの大きさがあり、入口を完全にふさいでいた。55号はすぐに太郎を後ろに隠(かく)した。太郎は、緊張(きんちょう)しながら55号の肩(かた)から少しずつ覗(のぞ)いた。

（なんてバカでかいんだ！55号さん大丈夫(だいじょうぶ)かなあ？）

55号は、どうしたら太郎を守(まも)ることができるのか、一生懸命(けんめい)に考えた。



55号は、パパのところまで連れて行くという約束のために、太郎と一緒(いっしょ)にここまで来た。約束を守ることは、正確に動くロボットにしてみれば当たり前のことだ。

しかし、今の55号は違(ちが)っていた。

太郎は、55号にとってもうただの少年ではなく、初めてのかけがえのない友達(ともだち)になっていた。

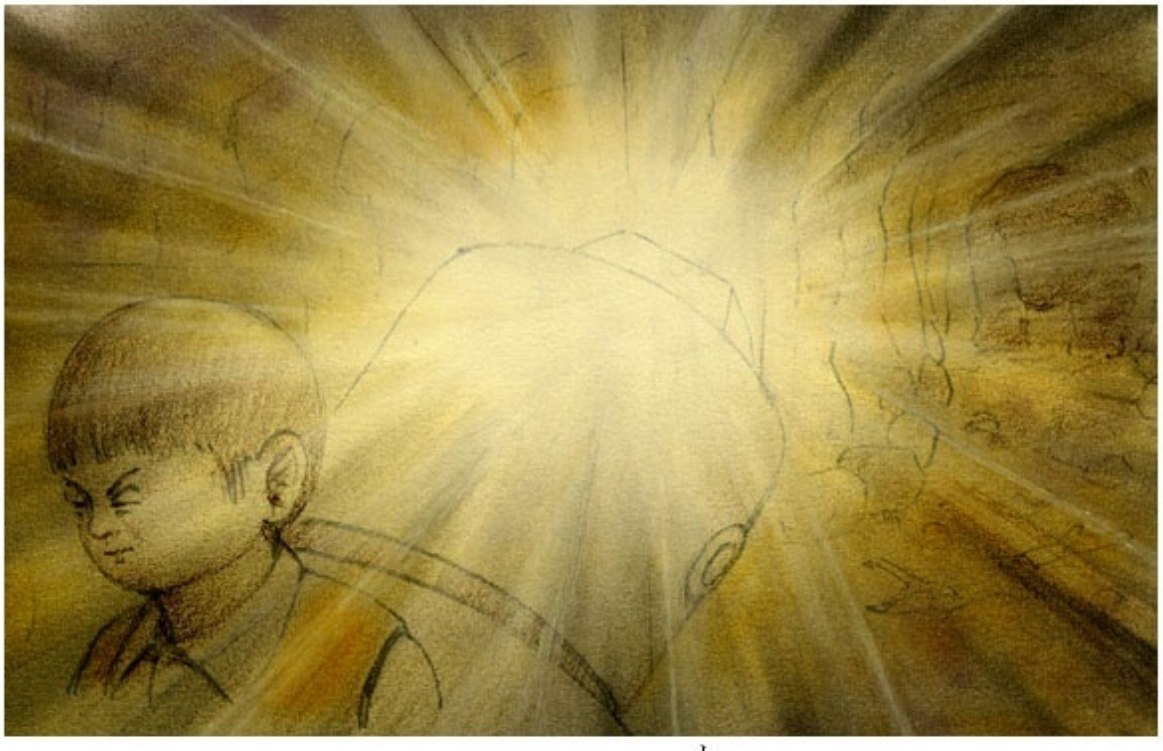
太郎をクマの餌食(えじき)なんかにしたくない、大切な友達を絶対(ぜったい)

に守りたい、そんな強い気持ちが彼を動かしていた。

クマは、55 号が考えている間も、ゆっくりと二人に近づいていた。

55 号はずいぶん考えていたが、後ろでおびえている友達を必ず助けるには、これしかないとやっと決心した。

その方法は、決してロボットのやることではなかった。

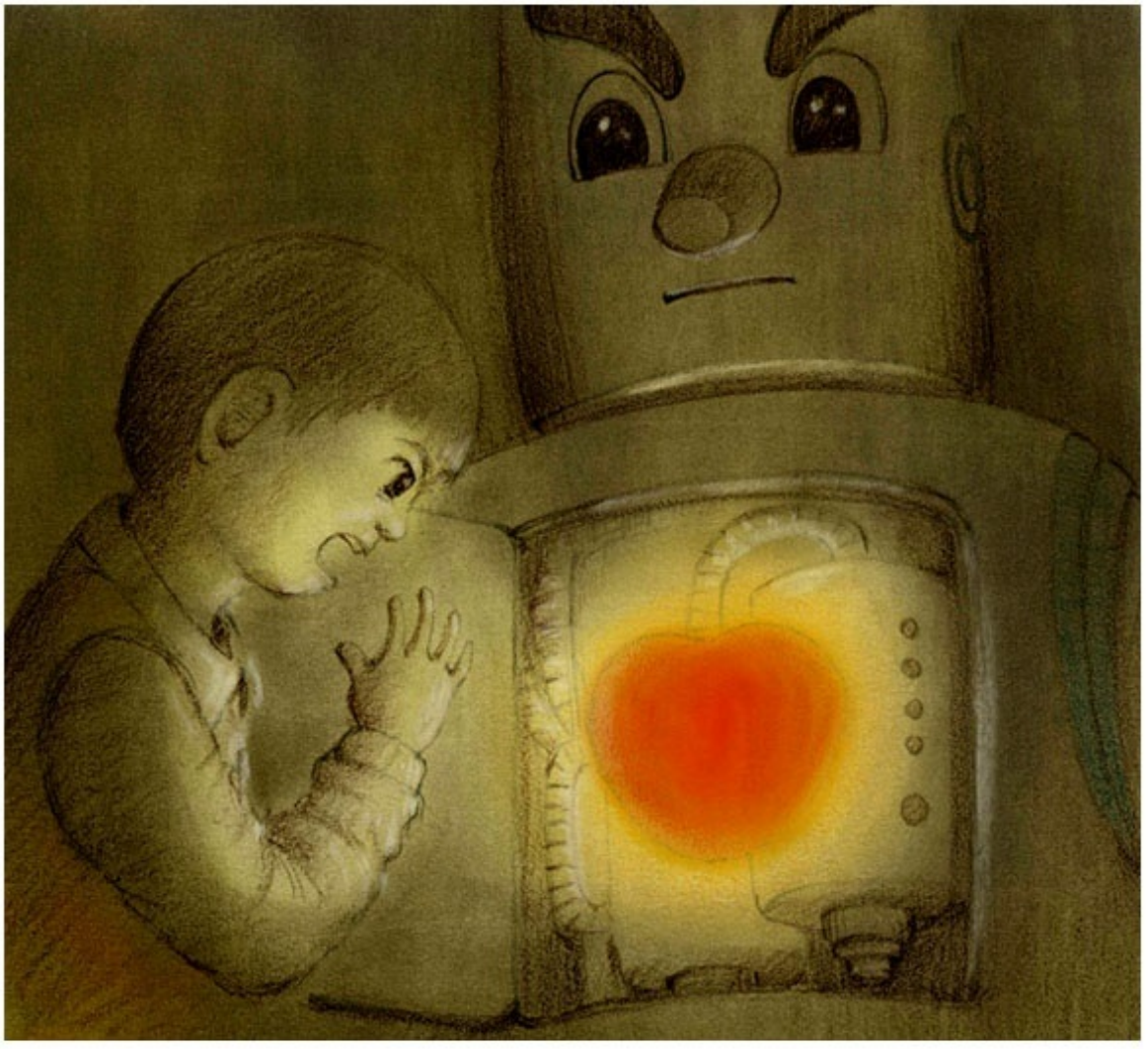


「太郎君、すぐに後ろを向いて目を閉じるんだ」

55 号は肩越しにそう言うと、クマの方に頭のライトを向け、全身の力を込めて強烈な光を放った。

ほら穴の中は、その一瞬真っ白になった。クマはこの閃光をまともに見てしまい、身動きが出来なくなった。

55 号はクマが動けなくなったすきに、太郎の方を向き、そして自分の胸(むね)の 扉(とびら) を開けた。



なかには、機械(きかい)がぎっしりと詰(つ)まっていて、中心のハート形のものは赤々(あかあか)と 輝(かがや) いていた。

太郎は恐怖(きょうふ)で震(ふる)えていたが、55 号が扉を開けたとたん、びっくりして震えるのを忘れてしまった。太郎はぽかんと口を開け、目をぱちくりさせて体の中を覗(のぞ)き込(こ)んだ。

「太郎君、太郎君！」

55 号は、機械に驚いている太郎に呼びかけた。太郎は、気がついて 55 号を見たら、彼が怖いほどの真剣な顔をしているので、またびっくりした。

「太郎君、一度しか言わないからよく聞いてよ。

見ての通り、この中にはとても大事なものが入っているんだ。

僕は、これからこの大事なものを取り出す。僕はこれがなくなれば動けないんだ。もちろん君と話すこともできない。

だから、僕がこれを取り出したら、君はすぐにこの中に入って、扉を閉め鍵をかけるんだ。

クマがいなくなるまで絶対に開けてはいけないよ。わかったね」

太郎は唐突なことなので、半分も理解できなかった。

55 号がいざ機械を取り出そうとすると、どうしたことか手が震えてできなかった。
彼は何度も試(こころ)みるが、手が思うように動かない。

（えっ、……どういうことだ。……なぜ？……
なぜ動かないんだ。……ロボットの僕には無理(むり)なのか？）
「うぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅー」
55 号は、自分の手を見ながらうめいた。

バキッ！

55 号はその音にぎくっとして、後ろを振り返った。クマが床に落ちている枯(か)れ木を踏(ふ)んだのだ。クマは目が見えるようになり、二人の方に来ようとしていた。55 号は急いで手で太郎の目を覆(おお)い、もう一度クマに光の目つぶしを食(く)らわした。

クマは、また動きを止めた。

55 号は、クマがしばらくは近寄(ちかよ)って来ないだろうと思い、機械(きかい)を取り出すことに改(あらた)めて集中(しゅうちゅう)した。でも、

「だめだ。……だめだ。だめだ。だめだ」

彼は何度も何度も頑張(がんば)るけれど、取り出すことができず、焦(あせ)ってきた。情(なさ)けなくなってきた。

彼は、もどかしい思いで自分の両手を見つめた。

55 号がどうしていいのか分からなくなっていると、太郎の

小さな手が伸(の)びてきた。太郎はやさしく 55 号の手に触(ふ)れた。

55 号は太郎を見た。太郎は目にいっぱい涙(なみだ)を浮(う)かべ、心配(しんぱい)そうに彼を見ていた。

55号は太郎の涙を見て、思わず引き寄せ抱きしめた。

（太郎君は、僕のために泣いている。ロボットの僕のために泣いている）

55号は、腕の中で太郎の温もりを感じ、友達の存在を実感した。

（こんなことじゃいけない！）

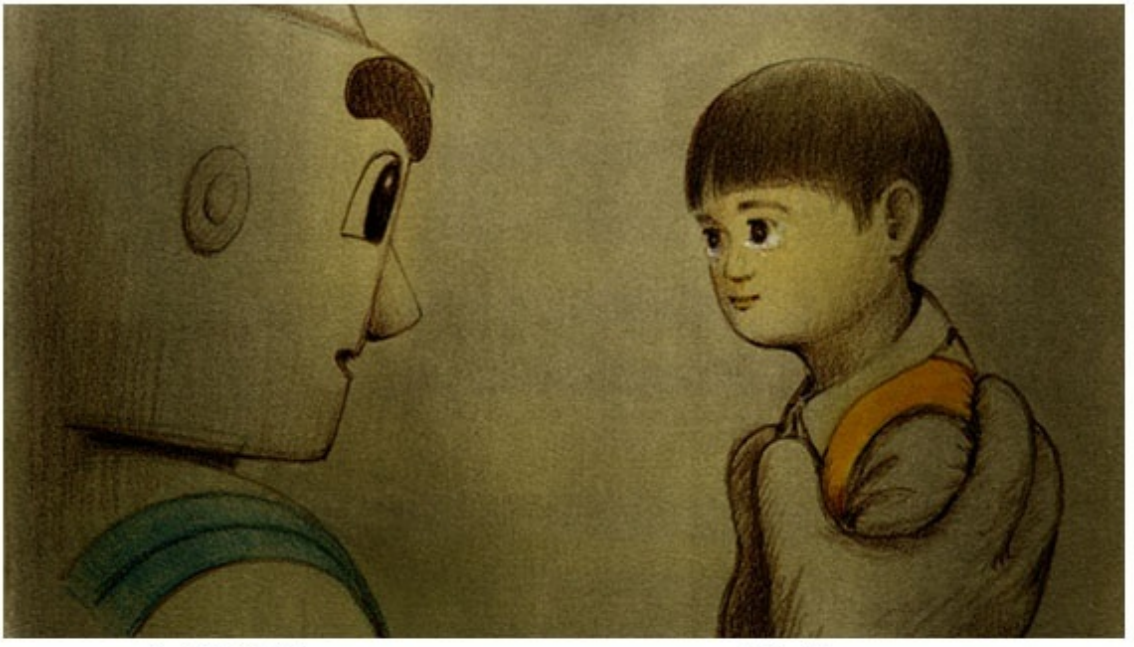
この大事な友達を絶対守らなければという強い熱意が、彼の心に戻ってきた。

55号は、大きな手で太郎の肩をぎゅっと握り、

「太郎君、僕はもう大丈夫。パパ、ママと会えるように、僕は頑張る。だから君も頑張るんだよ。絶対あきらめてはいけない。あきらめたら、そこで終わりだ。いいね」

と、曇りのない声で真剣に、そしてやさしく話した。

太郎は涙をこらえて、大きくうなずいた。



55号は深呼吸して、ゆっくりと中の機械をつかんだ。もう彼の両手は、まったく震えていなかった。そして、

「えいっ！」

55号は掛け声をかけ、一気に取り出した。

太郎に向ける熱意によって、彼はロボットの枠を超えたのかもしれない。

55号の胴体の中の機械は、彼の足の上に転がり出た。

赤く光っていたハート形のものは、しだいにその光を失っていった。

太郎は、思わずその上に手を乗せた。

55号の温かさがまだ残っていた。

輝きが無くなっていくハートを見て、

太郎はこらえきれなくなり、その上に涙をこぼした。

「55号さーん、55号さーん」

太郎は泣きながら彼の名を呼び、彼の体をゆすった。

だが55号は、目閉じ両腕(りょううで)をだらりと下げたままで、何の反応(はんのう)もなかった。

「55号さーん、起きてよー」

太郎は彼の体をゆすり続(つづ)けたが、彼はもう動くことはなかった。話すこともなかった。

太郎は、機械(きかい)を取り出すことがどういうことなのか、今わかって、動かない55号に抱(だ)きついて泣いた。

「55号さーん、動いてよー。
ちょっとでいいから動いてよー。
あぁぁーん、あぁぁーん。
ぼくひとりにしないでよー。
あぁぁぁぁぁーん」

太郎は55号にしがみついて泣いていたら、55号の後ろの薄暗い中に恐ろしいものが見えた。

動けるようになったクマが、ゆっくりと太郎に近づいていたのだ。

「あわわわわわわわわわわわわわわー、あわわわわわわわわわわわわわわわわわわわー。ククククククククククククククククククククククククククククマがー」

太郎は、泣いている場合じゃなかった。

太郎は大慌てで、55号の体の中に飛び込んだ。それは、55号の指示を思い出したからではなく、クマから身を隠す場所が目の前にあったからだった。

扉を閉めようとした時、55号の光を完全に失ったハートが、太郎

の目に入った。でも太郎は急いで扉(とびら)を閉め、鍵(かぎ)をかけた。

「55号さんは、もう死んじゃったんだ」

太郎は、中に入ってから、さみしくつぶやいた。

55号の中は、真っ暗だった。

太郎は怖(こわ)くて、膝(ひざ)を抱え震(ふる)えていた。

（クマは、もうそばにいるのかなあ？

これからどうなっちゃうのかなあ？

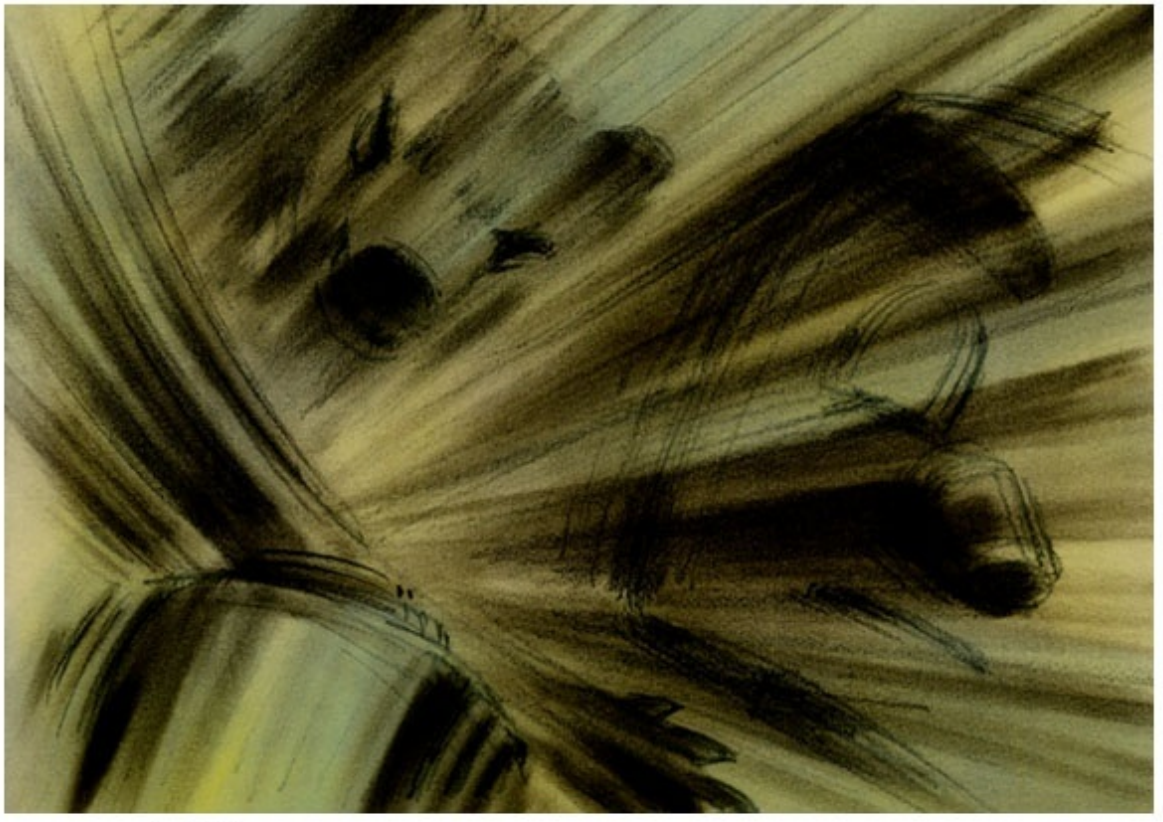
パパ、ママ、会いたいよー。55号さん、見守ってよ）

7　クマの激しい攻撃

クマは 55 号に近づくと、においを嗅ぎ、ゆっくりとその周りを回った。クマは一周すると、頭で 55 号を軽く小突いた。
暗闇は、ぐらぐらっと揺れた。
それだけで太郎の心臓は、破裂するほど波打って、彼は息をするのも苦しくなった。暗い中に、彼の荒い息づかいが大きく響いた。
ハーッハーッハーッハーッハーッ……
太郎は、クマに聞かれてしまうと思い、両手で口を覆い、眼をキョロキョロさせた。

クマは、この中に人間のいることは、においですでにわかっていた。
クマは 2 回小突いたあと、おもむろに立ち上がった。
そして、クマは右の前足を静かに振り上げ、一呼吸おくと 55 号の頭めがけ、すごい勢いで振り下ろした。

バッシーン！



55号の頭部(とうぶ)は、大きな音を立ててぶっ飛んだ。

飛ばされた頭は、強烈(きょうれつ)に岩壁(いわかべ)に激突(げきとつ)し大きく跳(は)ね返(かえ)って、みじめに地面を転(ころ)がった。

胴体の中の太郎にも、大きな衝撃(しょうげき)が伝わった。彼は、とっさに両手両足に力を入れて自分を支(ささ)えた。でも太郎の体も胴体の中でぶっ飛んだ。

少しすると揺(ゆ)れは収まり、また不気味(ぶきみ)な沈黙(ちんもく)が戻(もど)ってきた。

ドッキンドッキンドッキン……

太郎の心臓(しんぞう)はまさに口から飛(と)び出(で)そうだった。

しばらくすると、太郎は上のほうから弱い光が漏(も)れているのに気がついた。55号の首があったところに、3センチほどの穴が開いたのだ。

彼は、その穴から外の様子をうかがったが、外は薄暗(うすぐら)くて、どうなっているのかよくわからなかった。

するとその小さな穴の向こうで、何かがキラッと光った。彼は何だろうと思い、じーっと注意深(ちゅういぶか)く穴の先を見た。息を殺(ころ)して見た。

「あっ！」

太郎は思わず声を漏(も)らしてしまった。

光ったものは、恐(おそ)ろしいことにクマの目だった。

太郎の声をきっかけに、クマは突然暴(あば)れだした。

クマは、前足や頭で何度も何度も頭部のない 55 号を突(つ)き飛(と)ばした。

バーン、バーン、ガーン、ガーン。

荒々(あらあら)しい攻撃(こうげき)は、休みなく続いた。

55 号の体は、強烈(きょうれつ)に壁(かべ)や地面(じめん)にぶつけられ、傷(きず)だらけになっていった。

その猛烈な攻撃で、55 号の左足は胴体から引き抜かれ飛ばされてしまった。左足は頭部の方に転がって、偶然にも自分の頭の上にちょこんと乗ってしまった。

55 号は本当に悲しい姿になった。

クマの攻撃が激しいので、太郎の体は上下左右に大きく揺すぶられ、55 号の胴体の内側に強くぶつけた。

そして、太郎は何度もぶつけているうちに、気を失ってしまった。

どのくらい時間が経(た)ったのだろうか、太郎は意識(いしき)を取り戻した。

暗闇(くらやみ)はすごく静かだった。

（あれっ、どうしたんだろう？……

痛(いた)い！……いててててー……えーっと、……

あっ、そうだ、クマだ。クマはどうしたんだろう？）

ちょっと動かすだけで、身体(からだ)じゅうが痛い。

太郎は痛みを我慢(がまん)して、ゴソゴソと胴体の中を動き、4つの小さな穴から外をのぞいた。

ほら穴は薄暗(うすぐら)かったが、クマのようなものは見えなかった。

太郎は耳をそばだて、クマがいないか外の音に集中した。

何の音もしない。

（すごく静かだ。……クマは……いないんだ。

……きっとほら穴から出て行ったんだ。……

クマがいない間に、逃(に)げなきゃ。今、逃げよう）

太郎は静(しず)かに鍵(かぎ)を開け、恐(おそ)る恐(おそ)る胸(むね)の扉(とびら)を押(お)し上げた。

クマは、胴体の中から見えないところで物音をたてず、太郎が出てくるのをずっと待っていた。

（フッフッフッフッフッ）

扉が開くと、クマはにんまりとし、前足を伸ばそうとした。

そのときだった。

ガッチャーン、ガチャガチャガチャーン。

大きな音がほら穴に響き渡った。

黄色のハンカチの巻いてある左足が、頭部からずり落ちたのだ。

太郎はそれを聞き、びっくりして扉を閉め鍵をかけた。

（ふーっ、危なかった。まだクマがいるんだ、たぶん）

太郎を守った大きな音のタイミングの良さは、神がかったものがあった。……ひょっとして、55号が？

クマは、もう少しで獲物を手に入れることができたのに、それをじゃまさせて、カンカンに怒っていた。

「くうーっ、じゃましやがって！」

クマは、55号の頭と足を力いっぱい蹴飛ばした。

そして情け知らずの激しい攻撃が、また始まった。

ゴロゴロゴロゴローン、

ガガガガガガガガーン。

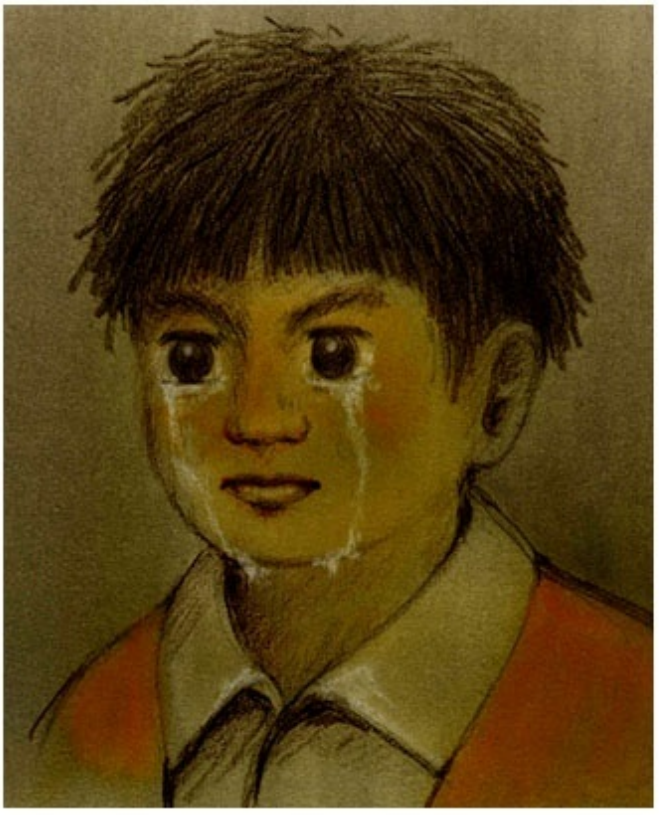
55 号は何度も頭でほら穴を突きまわされ、まるでサッカーボールのようだった。

ガンガンガンガンガンー、

バンバンバンバンバンバンー。

クマは、全体重をのせて前足で繰り返し蹴ったり踏みづけたり、徹底的に55号を痛めつけた。

その攻撃の音は、ほら穴に恐ろしく響いた。



怖いためか、体が痛いためか、太郎は涙が止まらなかったが、真っ暗な中で必死に頑張っていた。

（55号さんは、大事な機械を捨てて、僕の隠れ場所をつくってくれた。

ほんとに動けなくなるなんて思わなかった。そんな大事なものを僕のために。だから、僕は絶対にクマなんかにつかまったらだめなんだ。

パパとママに会うまでは頑張れって、55号さんが言ってた。

あきらめるなって言ってた。

あきらめるもんか！負けるもんか！絶対に負けるもんか！）

太郎は、55号の最後の言葉を思い出しながら、歯を食いしばって耐えていた。

太郎が大きく揺れるたびに、彼の涙はあちこちに飛び散り、55号の胴体をぬらした。

8　悪魔のクマと熱意の55号

ドンドンドン、バンバンバン、ドスンドスンドスン、

ガガガガガー、ギギギギギー。

クマの攻撃は止まらない。

55号の体はとても丈夫にできているが、敵のしつこい攻撃で、へこんだり曲がったり大きく変形してきた。

クマは、一本だけ残った右腕にかみつき、55号を振り回した。変形した55号は、壁や地面にぶつけられ、さらにボロボロになっていった。

そして、クマが55号を振り上げた拍子に、胴体は腕の付け根からすぽーんと抜け、クズ鉄のかたまりとなって、入口の方に飛んで行った。

ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ……

まるで敵から逃げるように、クズ鉄は転がり続け、とうとうほら穴の外に出た。胴体は、石ころだらけのなかを転がり、河原の中ほどでようやく止まった。

すると、鍵が壊れたのか、パカーッと扉は開いてしまった。なかの太郎は、ずいぶん転がされたので目を回していたが、突然明るくなってびっくりした。

扉の外はさんさんと太陽の光が降り注ぎ、きれいな青空が広がっていた。

太郎はまぶしいので手をかざしながら、青い空を見た。

（あれっ、外？

外だ。外にいるんだ。

僕、外に出られたんだ。

それじゃクマから逃げられたんだ。……

助かったんだ）

太郎が助かったと思った次の瞬間、青空が真っ黒になった。

（ん！なんだあ？どうしたんだ？）

彼は目の前のことが理解できず、眉をしかめた。

「あっ！……」

目の前の黒いものは、あのでっかいクマだった。

クマは、太郎をにらみ、両手を上げて立っていた。クマもあのオオカミと同じように執念深く、獲物を追って来たのだ。

太郎は飛び上るほど驚いた。55号の胴体も大きく揺れた。

太郎が扉を閉めなければと思った時には、もう扉は遠くにはらい飛ばされていた。

もう太郎の隠れるところはなくなってしまった。

敵は圧倒的な恐ろしさを放って、太郎を見据えていた。
太郎とクマとの間には、何もなくなった。隠れ場所であった 55 号の胴体が、今度はおりのようになって、太郎はどこにも逃げられなくなってしまった。

彼は完全に追い詰められた。

５才の子供が、こんな大きなクマと戦えるわけがない。彼は怖くて、敵をまっすぐ見ることができなかった。
敵は絶対の余裕を持って、胴体の中を覗き込んだ。
クマの目は悪魔の目だった。
悪魔はゆっくりと口を開けると、鋭い牙がギラッと光った。
太郎は55号の中で目を閉じ、身を縮め、ガタガタと震えだした。
（パパ、ママ、パパ、ママ、ああああああああああああー）

太郎の震えはすぐに55号に伝わり、でこぼこになった胴体がガタガタと揺れ始めた。

ガタガタガタガタ、ガタガタガタガタ。

二人の震えは共振したのか、胴体の揺れはグラグラグラグラへと変わった。

それからその揺れはグラングラン、グラングランと徐々に大きくなった。

おいしい食べ物を前にして、よだれを垂らしているクマは、奇妙な動きをしている太郎たちに戸惑った。

グラングランはグラーングラーンに変わり、そして最後には胴体はゴロンと裏返しになった。

悪魔は、思わず目を丸くしてしまった。

（変な動きで、この俺様をびっくりさせやがって！）

クマは頭にきて、力いっぱい胴体を蹴飛ばした。

「いてててて一！何だ？……

あれっ！何かおかしいぞ！」

クマは胴体をひっくり返そうとしたが、下の石にくっついたように全く動かなかった。

「これはいったいどうなっているんだ？」

ほら穴の中でも、不思議なことがあった。

太郎が扉を開け胴体から出ようとしたとき、危険を知らせるかのように、55号の足が頭部からずり落ち大きな音がした。その音で太郎は助かった。

また、クマのいるほら穴から脱出させるように、胴体が外までコロコロコロコロ転がり続けた。

そしてまた、胴体が揺れて裏返しになったり、クマが必死に

胴体をひっくり返そうとしてもできなかった。

それは、まるで55号が太郎を守(まも)っているかのように。

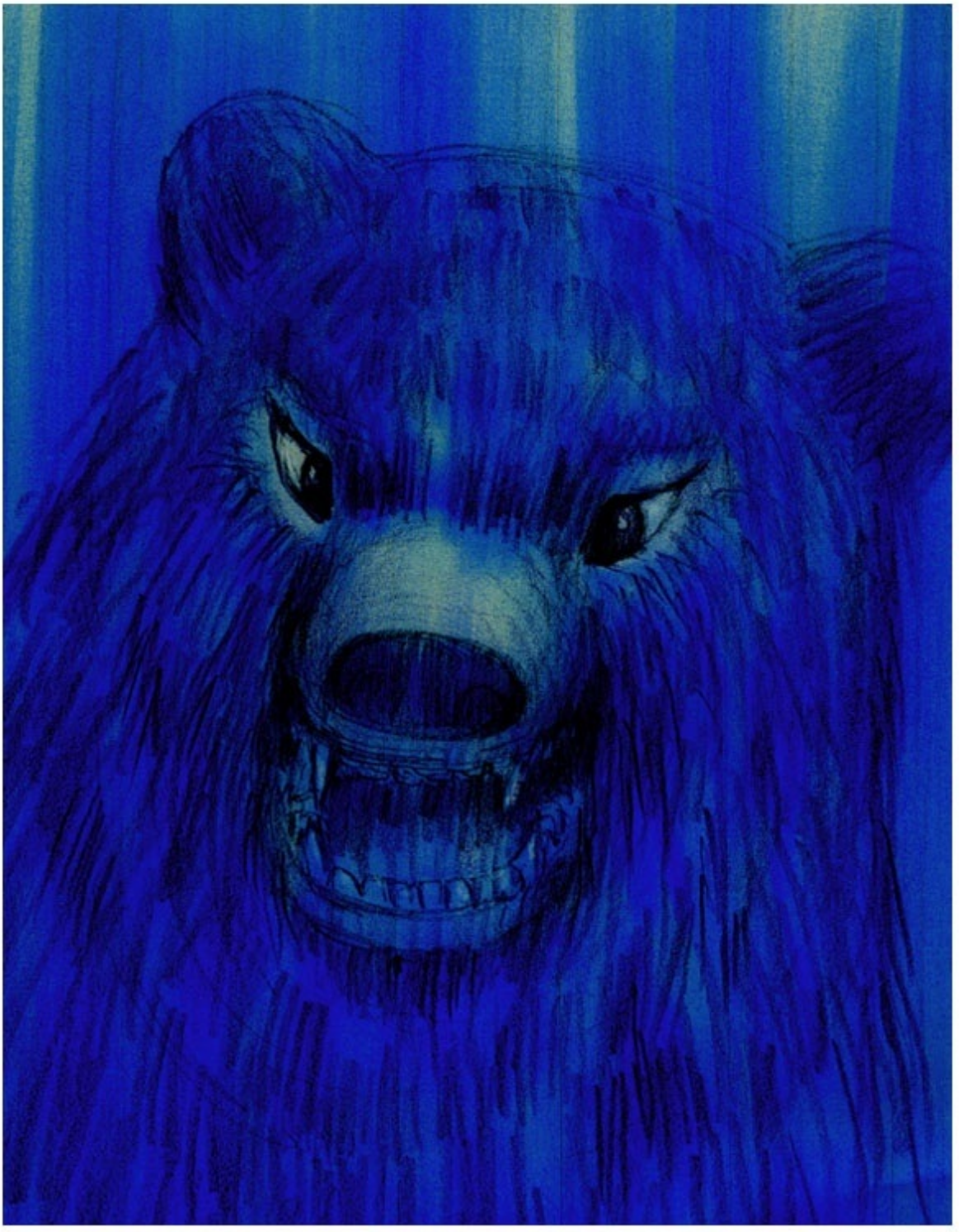
55号はロボットだから、なかの機械(きかい)を取り出せば当然(とうぜん)動かなくなる。……しかし動いている。

動いているのは、友達(ともだち)の太郎を守るという熱(あつ)い気持ちが55号の体に残(のこ)ったからではないだろうか。

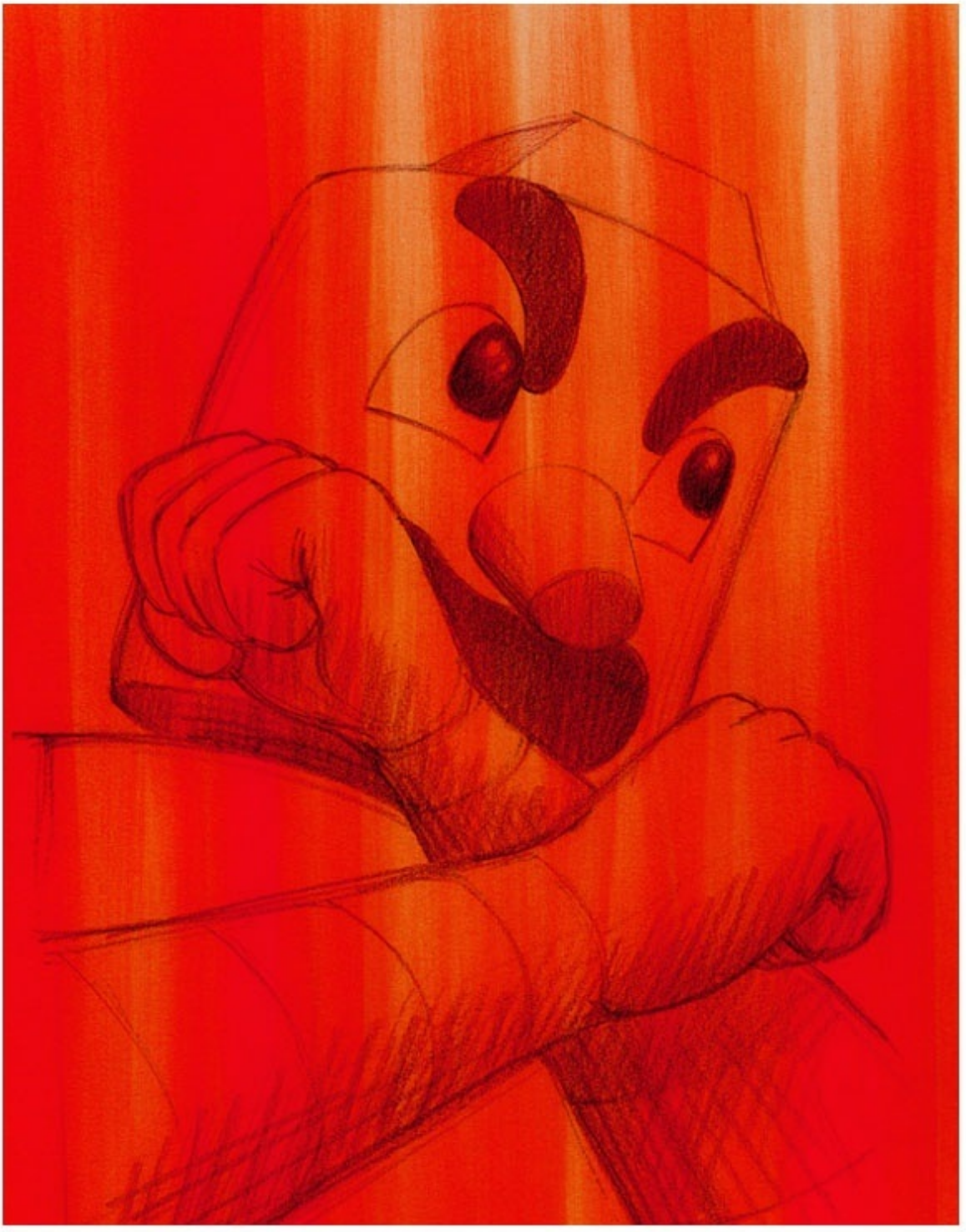
だから悪魔(あくま)は今、55号の炎(ほのお)のような熱意(ねつい)と戦(たたか)っているのだろう。

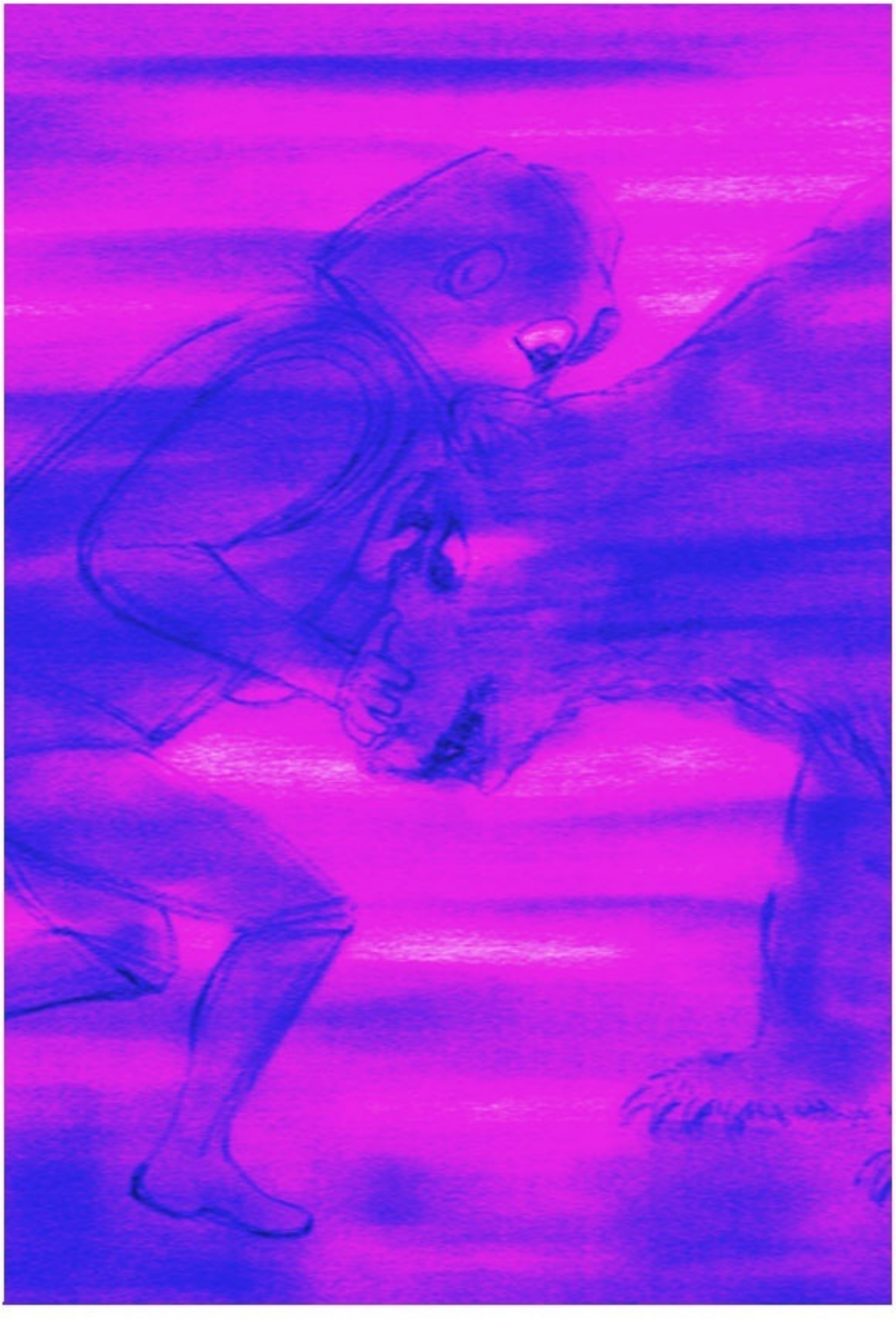
ふざけやがって、絶対(ぜったい)に許(ゆる)さんぞー！

ウオォォォォォォォォォォォー！



僕(ぼく)の大事な大事な大事な太郎君を、お前なんかに渡(わた)してたまるかー！





激闘はしばらく続いた。

クマが55号の胴体をひっくり返すことに苦労していると、

バーン、バーン、バーン、バーン。

ライフルの音が紅葉した森にこだました。

クマはすばやく振り返った。

川下に5、6人の人間がいた。

バーン、バーン、バーン、バーン。

「うっ、うううううううーー」

ライフルの弾(たま)はクマの肩(かた)を貫(つらぬ)き、顔(かお)が大きくゆがんだ。

「うぅぅぅー、うぅぅぅー。……うぅぅぅー。

えーい、もう少しだったのにー」

クマは55号たちをにらみながら、森の中へ逃(に)げて行った。

太郎と55号が戦(たたか)った悪魔(あくま)は去った。

太郎のパパを中心とした捜索隊(そうさくたい)が、55号の胴体(どうたい)に駆(か)け寄(よ)って来た。クマの容赦(ようしゃ)のない攻撃(こうげき)によって、胴体はクズ鉄(てつ)のかたまりになっていた。

彼(かれ)らは、変(へん)なかたまりを前にして、顔(かお)を見合わせた。

なかの太郎はクマが逃(に)げて行ったことを知らず、まだ目を閉じてブルブル震(ふる)えていた。だから、かたまりもガタガタと小刻(こきざ)みに揺(ゆ)れていた。

「これ、動いているぞ。なかに何か入っているんじゃないか？」

一人がそう言って、軽々(かるがる)とそのかたまりをひっくり返した。

「あっ！」

クズ鉄(てつ)の中に、8 日間も必死(ひっし)で探(さが)していた太郎が入っていたので、みんなは腰(こし)が抜(ぬ)けるほど驚(おどろ)いた。

「太郎、太郎」

パパが呼(よ)んだ。でも太郎はまだ恐怖(きょうふ)の中にいて、呼ばれていることに気がつかなかった。

「太郎、太郎、太郎」

太郎はようやく目を開け、そとを見た。クマではなく人間の大人たちが覗(のぞ)き込(こ)んでいたので、太郎はあれっと思い、目をぱちぱちさせていた。

「太郎、パパだよ。迎(むか)えに来たよ」

パパがそう言って、両手を差(さ)し出した。

「あっ、パパー」

太郎はパパと分かると 55 号から飛び出し、パパに抱(だ)きついた。そして彼は、大きな声を出して泣(な)いた。

万歳や拍手して喜ぶ人間たちの近くに、ボロボロになった胴体が転がっていた。頭も手も足も扉も、そして大事な中身もない、もとが何であったのか分からないほどに変わり果てた55号がいた。

そんな55号の上に、すがすがしい風が流れた。
胴体は風に揺れ、下の石にあたってコトコトコトコトと鳴った。それはまるで55号が笑っているようだった。
たくさんのかわいいもみじの葉が風に乗り、胴体の上にひらひらと舞い降りた。
コトコトコトコト、コトコトコトコト。
55号が嬉しそうにまた笑った。

9　その後(ご)

6か月が過(す)ぎた。

山はしばらく雪化粧(ゆきけしょう)をしていたが、今ではきれいな緑(みどり)で覆(おお)われていた。

太郎が通(かよ)う幼稚園(ようちえん)も桜(さくら)や春の花で彩(いろど)られていた。

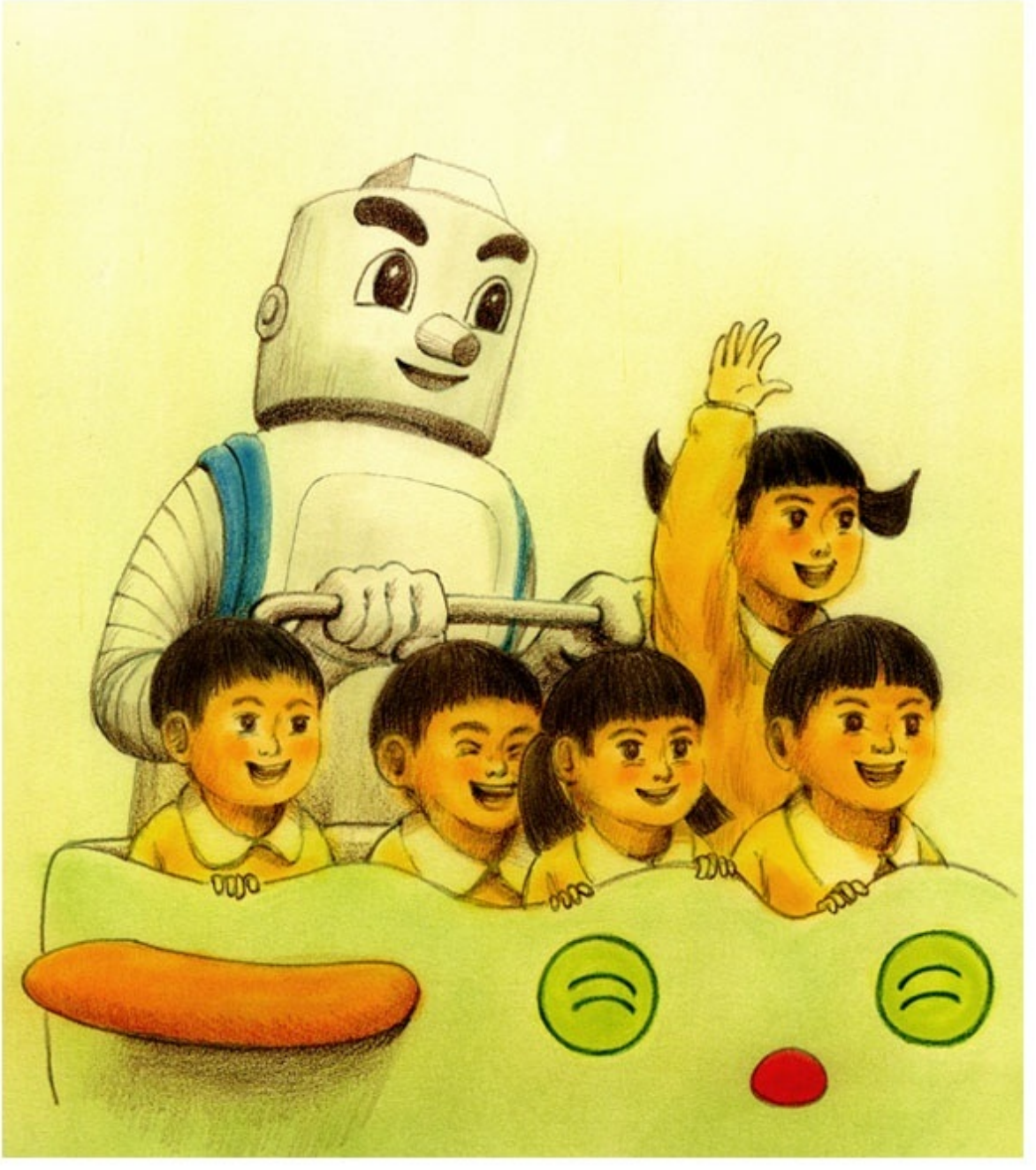
その花の向こうでは、たくさんの子供たちが元気よく走り回っていた。

「先生—、ジロー先生」

「ジロー先生、僕も」

「私も、私も」

かわいい園児たちが、一人の先生のまわりに集まり、手を上げて順番を待っていた。



あれから、55 号は元の体に直してもらい、この幼稚園の先生になっていた。彼は名前をジローと付けてもらい、太郎の家で暮らしていた。

ジローはたくさんの友達に囲まれて、すごく幸せだった。

花を大切にすれば、きっと花から安(やす)らぎの時間を得(え)ることができるだろう。

川のごみを拾(ひろ)えば、きっと澄(す)んだきれいな水を手に入れることができるだろう。

人のために一生懸命(けんめい)になれば、きっといい友達(ともだち)を持(も)つことができるだろう。

彼はロボット55号

http://p.booklog.jp/book/73372

著者 : sennmi
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sennmi/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/73372

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/73372

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ